陸前高田市文化財調査報告書第２９集

本宿館(横田城)跡発掘調査報告書

―熊野神社社殿移築工事関連遺跡発掘調査―

岩手県陸前高田市教育委員会

２０１５年

本宿館(横田城)跡発掘調査報告書

序

陸前高田市は、豊かな自然のもと、海に川に、そして北上山系の山々から四季折々多くの恩恵を受けて発展してまいりました。市内には、沿岸部の縄文時代の多くの貝塚をはじめ中世期の城館跡など 260 か所余りに及ぶ遺跡が所在しております。このような文化遺産を保護・保存し後世に伝え活用していくことが私たちの責務であります。一方、豊かな地域つくりや市勢の発展に必要な公共事業や社会資本整備が必要であることも事実です。しかし一度破壊された遺跡は二度と元には戻りません。陸前高田市教育委員会では、これら開発事業及びこの間の東北地方太平洋沖地震と大津波被害後の様々の復興事業と貴重な遺跡の保護につきましては、関係機関と事前の協議を進め調整を図り、消滅の恐れのある遺跡について記録保存を目的とした発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、横田町の熊野神社社殿移築に伴い実施した本宿館跡の発掘調査成果を収録したものです。今回の調査では、空堀跡等が見つかり本宿館跡の施設の一部が確認されるという成果が得られ、陸前高田市の中世城館を知るうえで大変意義深いことと言えます。本書が、地域の方々をはじめ学術研究、教育活動などに広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓蒙に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました岩手県教育委員会をはじめ、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成２７年３月

陸前高田市教育委員会

教育長　　山 田 市 雄

例　言

１．本報告書は、岩手県陸前高田市横田町字本宿 53-2 に所在する本宿館跡の発掘調査結果をとりまとめたものである。

２．本遺跡の調査は、熊野神社社殿の移築事業に伴う発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会の指導を受け事業者と陸前高田市教育委員会との協議を経て、陸前高田市教育委員会が発掘調査を実施した。

３．調査期間と面積は次のとおりである。

平成 22 年度　　平成 22 年４月 16 日～12 月 15 日　　334 ㎡

平成 23 年度　　平成 23 年５月 16 日～　７月 19 日　　849 ㎡

４．発掘調査は、千葉正彦、半澤武彦（岩手県教育委員会）と遠藤優子（当教育委員会）が担当した。

５．発掘調査後の記録整理は遠藤優子が行い、調査記録の検討、考察、報告書原稿の執筆・編集は安井宣也（奈良市教育委員会派遣）、後藤円（当教育委員会）が行った。

６．掲載した土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖」によった。

７．発掘調査記録および出土遺物は、陸前高田市教育委員会において保管している。

目次

序
例言
目次
Ⅰ　調査に至る経過　2
　1　調査の経緯　2　現地調査について
Ⅱ　遺跡の立地と環境　3
　1　遺跡の位置　4　周辺の遺跡
　2　地理・地形的環境　5　歴史的環境
　3　基本層序
Ⅲ　調査と整理の方法　11
　1　野外調査　2　室内整理
Ⅳ　調査成果　20
　1　検出遺構　2　出土遺物
Ⅴ　総括　29
報告書抄録　42

図版目次

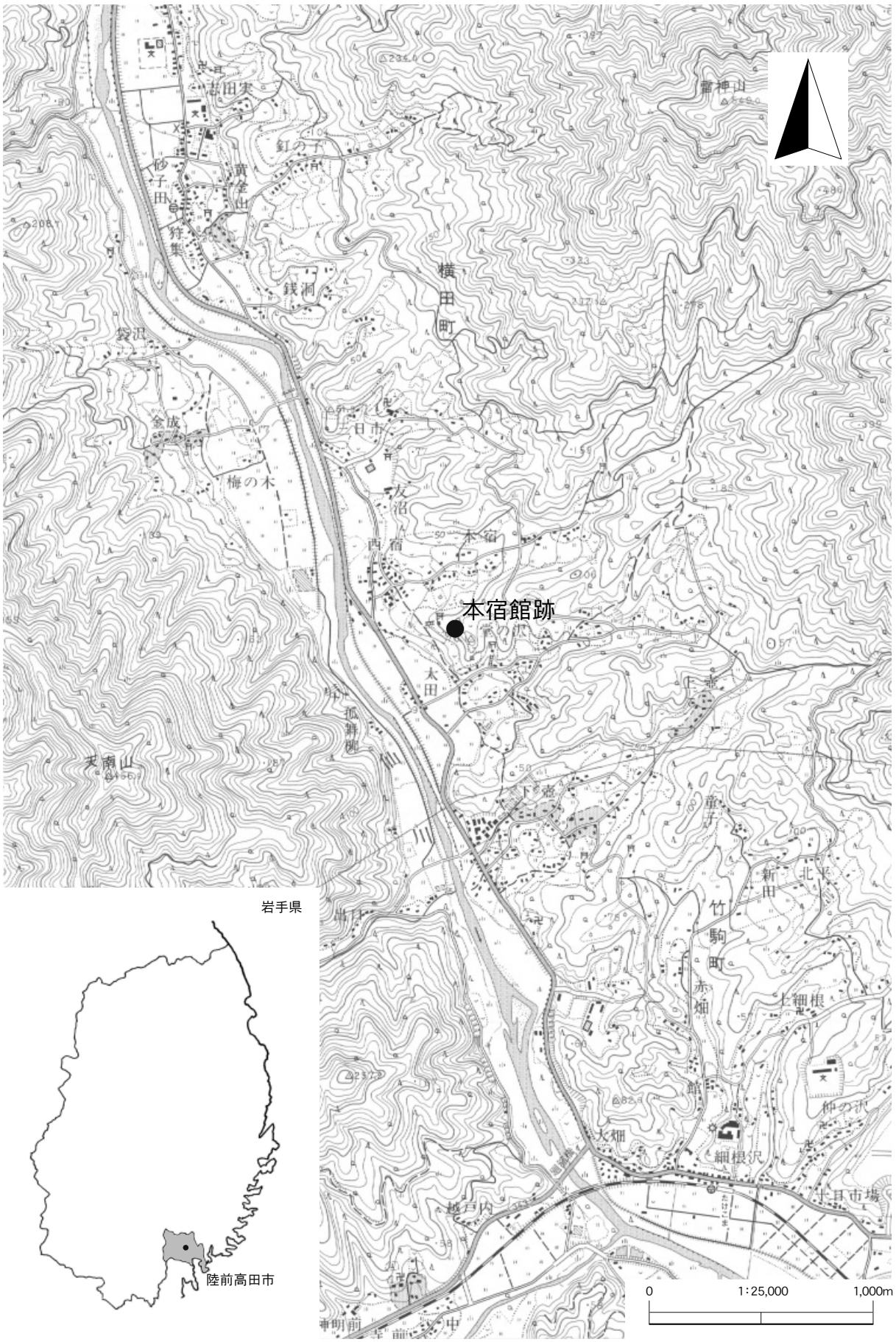
第１図　遺跡の位置　1
第２図　周辺の地質　5
第３図　周辺の遺跡　7
第４図　本宿館跡平面図　10
第５図　調査区位置図　13
第６図　調査区平面図１(2010 年)　14
第７図　調査区平面図２(2011 年)　16
第８図　調査区とグリッド設定　18
第９図　検出遺構平面図　19
第10図　堀土層断面図　22
第11図　土塁土層断面図　23
第12図　柱穴列平面図　27
第13図　出土遺物　28
第14図　遺構変遷図　30

表目次

第１表　周辺の遺跡　6
第２表　遺構埋土土層注記１　24
第３表　遺構埋土土層注記２　25

写真図版目次

写真１　本宿館跡　付近の航空写真　7
写真２　本宿館跡　航空写真　9
写真図版１　遺跡周辺の状況　34
写真図版２　調査地(2010 年)　35
写真図版３　調査地(2011 年)　36
写真図版４　堀 SD01・ SD02 土層断面　37
写真図版５　土塁 SX01　38
写真図版６　小土坑群①　39
写真図版７　小土坑群②　40
写真図版８　土坑・出土遺物　41


本宿館跡
横田町
日市
友沼
西宿
本宿
太田
孤舞郷
仙川
天南山
竹駒町
赤畑
上細根
仲の沢
細根沢
大畑
越戸内
十日市場
梅の木
金成
袋沼
銭洞
釘の子
黄金出
砂子田
狩集
雷神山
岩手県
陸前高田市
0
1:25,000
1,000m

第１図　遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経過

１　調査の経緯

今回報告する調査は、熊野神社の社殿の移築と敷地造成（事業面積：約 1,110 ㎡）に先立ち、記録保存を目的として実施した。事業地は副郭の東寄りで、事業内容は、現地表下 2～3mに達する切土工事によって敷地を造成し、そこに社殿を移築するというものであった。

平成 22 年 1 月 13 日、事業者が陸前高田市教育委員会に文化財保護法第 93 条第 1 項に基づく届出書類を提出し、平成 22 年 1 月 14 日付　陸高教生第 255 号で、陸前高田市教育委員会から岩手県教育委員会に届出書類を進達した。これに対し、平成 22 年 1 月 18 日付教生第 3-306 号で、岩手県教育委員会から事業者に対し、工事着手前に試掘調査が必要である旨が通知された。

その後、城館跡地内の事業地の対応について事業者と協議した結果、事業地全体を対象に記録保存を目的とした発掘調査を陸前高田市教育委員会が実施することとなった。

なお、調査費用は埋蔵文化財緊急発掘調査経費（国・県・市補助）による。

２　調査体制

平成 22 年度

調査主体　陸前高田市教育委員会
教育長　伊藤壽
総括　伊藤光高（教育次長兼生涯学習課長）
事務局　佐藤正彦（同課長補佐兼係長）
脇坂絵里（同主任）
調査担当　佐藤正彦（同課長補佐兼係長）
遠藤優子（同発掘調査員）
指導・助言　細谷英男（市博物館専門研究員）
発掘作業員　荒木コギク、荒木美智代、伊藤美和子、小金山一彦、菅野万里
釜石絵里、柴田千春、佐藤一男、佐藤いさ子、佐藤紀代子
鈴木貞子、鈴木義信、戸羽由美、新沼浩美、村上紀子、山谷辰夫
山谷富助
整理作業員　荒木美智代、戸羽由美、鈴木貞子、村上奈穂子、村上紀子

平成 23 年度

調査主体　陸前高田市教育委員会
教育長　―
総括　金賢治（教育次長（教育長職務代理者）兼生涯学習課長）
総括補佐・事務局　小岩孝朗（生涯学習課長兼係長）
調査担当　千葉正彦（岩手県教育委員会文化財専門員）
半澤武彦（岩手県教育委員会文化財専門員）
遠藤優子（生涯学習課発掘調査員）

発掘作業員　荒木コギク、荒木美智代、伊藤美和子、小金山一彦、戸羽由美
村上奈穂子、村上紀子、山谷富助
整理作業員　荒木美智代、戸羽由美、柴田千春、菅原とみ子、山谷富助

3　現地調査について（第 8 図、写真図版 2）

現地調査は、平成 22 年度と同 23 年度の 2 か年で実施した。

調査着手前の現地は、土塁の周囲が畑地や造林に伴う造成で、調査地の西側が伐採した木材の搬出路や駐車場・木材の仮置き場の造成でそれぞれ切土により改変されていた。

(1)　平成 22 年度

調査期間： 平成 22 年 4 月 16 日　～　12 月 15 日

調査概要　佐藤正彦との打合わせと指示により遠藤優子が現地での発掘調査を進めた。山林の伐採後、調査地の中央東寄りにある土塁の東・南・北側に調査区を設定し、遺構検出・掘削を行った。調査区の埋戻しは行っていない。

調査記録類及び書類は、陸前高田市教育委員会で保管していたが、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震と大津波被害によりすべて流失した。

(2)　平成 23 年度

調査期間： 平成 23 年 5 月 16 日　～　7 月 19 日

調査概要　東北地方太平洋沖地震と大津波被害のため十分な調査体制の取れない状況であったため、岩手県教育委員会へ調査員の派遣を要請した。調査期間前半の約 1 ヶ月間について、千葉正彦、半澤武彦(岩手県教育委員会)が調査を担当し、後半の調査を遠藤優子が担当した。

調査範囲は、最終的に事業地内のほぼ全域に及んだ。

着手後 10 日ほどは、前年度調査区の再精査と記録の再作成、及び堀跡と土塁の西側に遺構の遺存状態を確認するためのサブトレンチの掘削を行った。

その後、土塁の西側に調査区を、また調査地南西部の斜面に遺構の遺存状態を確認するためのサブトレンチを新たに設定して遺構検出・掘削を進め、前者は 6 月 8 日、後者は 6 月 2 日に写真撮影、追って図面作成を行った。

6 月 9 日以降は、土塁の半裁・除去とその下面の遺構検出・掘削、ならびに堀跡に 2 か所のサブトレンチの掘削を行った。7 月 14 日に調査地全域の写真撮影、追って図面作成を行った。

7 月 19 日に現地調査をすべて完了し、撤収した。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１　遺跡の位置

本宿館(横田城)跡は、北上山地から広田湾に南流する気仙川の河口から約６㎞上流寄りの岩手県陸前高田市横田町字本宿にある中世の城館跡で、気仙川左岸の氷上山の西麓に広がる丘陵上に位置する。現状は植林による林地で、尾根の末端に熊野神社がある。西側には陸前高田市から気仙郡住田町方面に至る旧街道と国道 340 号線が通り、北側の谷合いには本宿・西宿、南側の谷合いには堂の沢・太田の各集落がある。

２　地理・地形的環境

本宿館(横田城)跡がある横田町の南寄りでは、北上山地を南北に下刻して形成された気仙川の河谷があり、河谷内に谷底平野が形成されている。

山地・丘陵の地形・地質　本宿館跡がある左岸側と右岸側とで異なる様相を示す。

本宿館跡がある左岸側では、古生界（古生代の地層）の氷上花崗岩からなる氷上山（標高 872m）の西麓に中生界（中世代の地層）の花崗岩からなる標高 70m前後の緩やかに西に下る丘陵がみられる。丘陵は侵食が進んでおり、東西方向の尾根と谷が南北に交互に連なる。丘陵の先端部では、広田湾に面する地域の海岸段丘の基盤層と同様の礫を含むシルト・粘土層が基盤岩の花崗岩上に薄く堆積する。

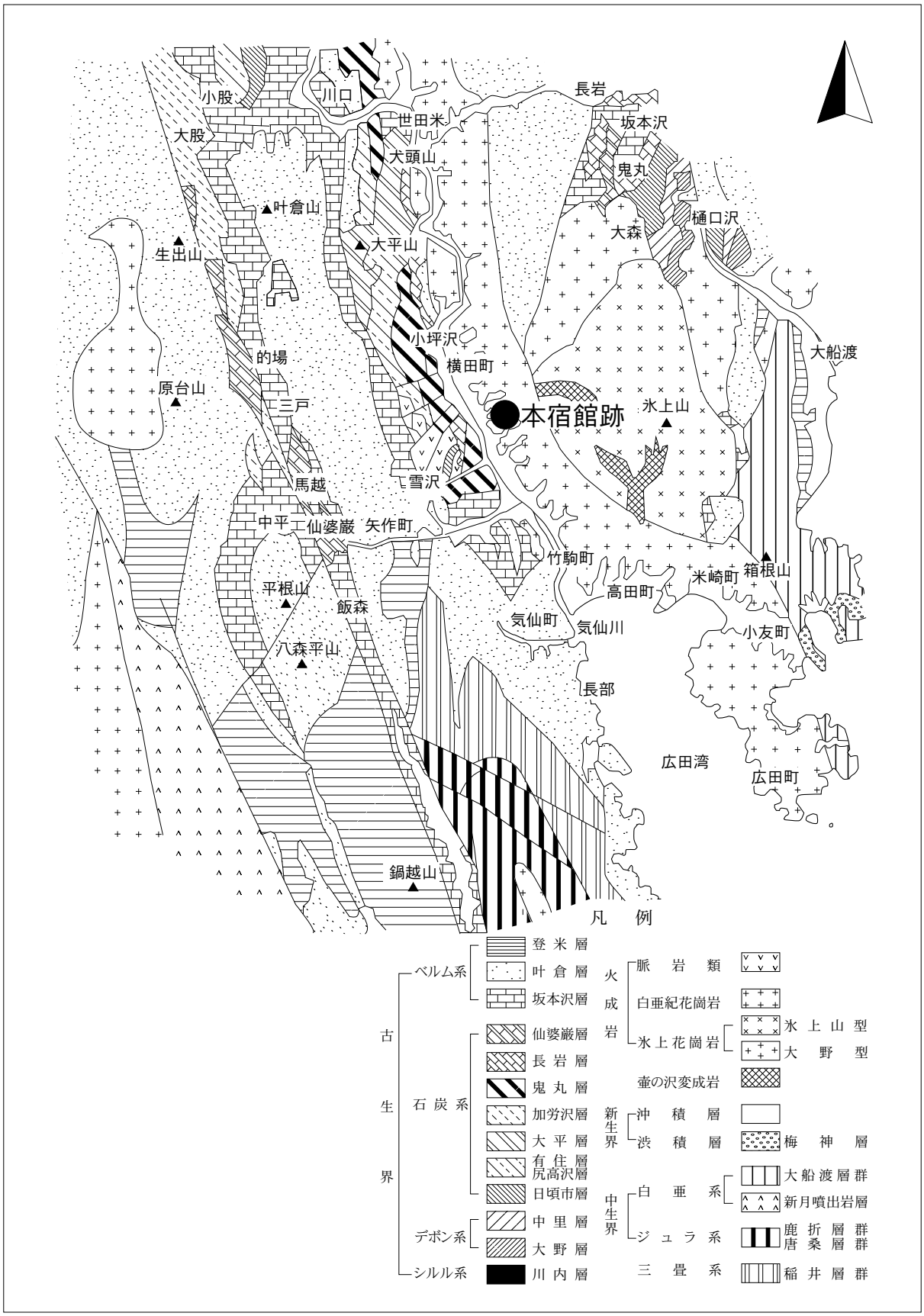
右岸側は古生界の堆積岩からなり、標高 50m前後の南北方向の尾根と谷が交互に東西に連なり、気仙川の河谷に面して急崖が続く。

現状は主に植林による林地であるが、丘陵の末端部では畑地もみられる。

気仙川の谷底平野の地形・地質　　気仙川の谷底平野は、横田町の南寄りでは幅 400m前後、標高 10m前後で、新生界完新統（新生代完新世の地層）の砂や礫の沖積層からなる。現状は主に水田や畑地で、1960 年代に圃場整備がなされているが、その前には旧河道を反映した地割がみられた。

気仙川の現在の河道は江戸時代以降に整備されており、比較的直線的で、両岸が堤防で護岸されている。水田や畑地の地割から読み取れる旧河道は複数あり、いずれも概ね１～1.5㎞おきに屈曲して蛇行する。本宿館跡のある丘陵のすぐ西側に旧河道の屈曲部があり、丘陵の裾近くに河流の側刻で生じた崖がみられる。

なお、地質の記載は陸前高田市（1994）と 20 万分の 1 地質図幅「一関」(2005) による。



第２図　周辺の地質（「陸前高田市史第二巻」より（再トレース））

3　基本層序

後世の改変を受けていない部分では、基本的に腐植土を含む黒色の表土（厚さ 0.5m前後）の直下で地山、あるいは後述する堀の埋土や土塁の盛土の上面となる。地山上面は、土塁の東側が風化した花崗岩、それより西方が黄褐色の礫を含むシルト・粘土からなる。東から西に向かって緩やかに下っており、その標高は概ね 60.0～62.5mである。

城館跡の遺構面は、表土直下の地山と土塁の盛土の上面である。

Ⅰ-1 層　10YR2/2 黒褐色砂質シルト　表土

Ⅰ-2 層　10YR3/3 暗褐色砂質シルト　表土

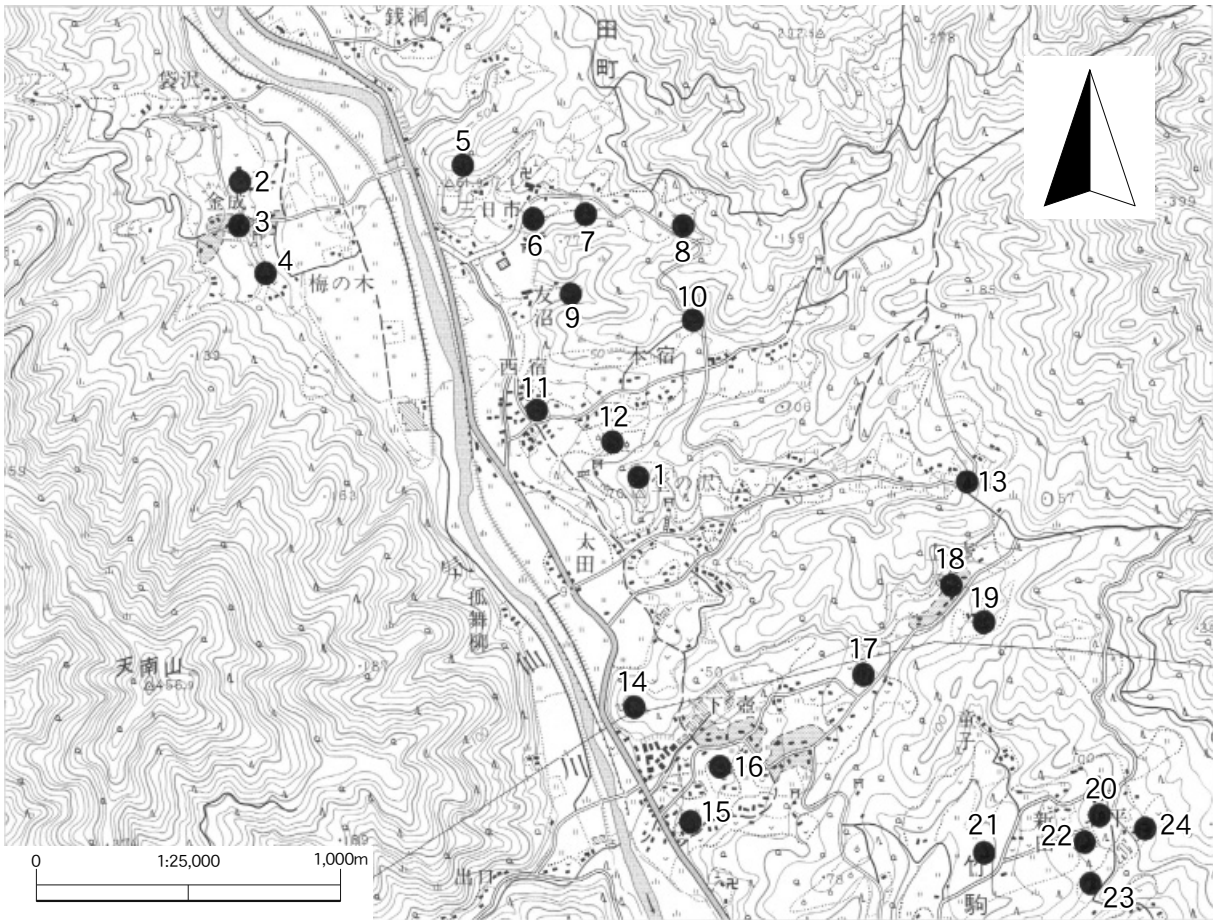
Ⅱ層　10YR6/4 にぶい黄橙色～10YR6/6 明黄褐色粘土質シルトまたはシルト質砂　地山

4　周辺の遺跡

気仙川の左岸では、丘陵上に縄文・平安時代の集落遺跡の友沼Ⅲ遺跡（陸前高田市教委 1990・陸前高田市 1995）、中世の城館跡の三日市館跡・壷館跡（紫桃 1972・岩手県教委 1986）があり、縄文土器等の遺物散布地が 10 箇所ほど確認されている。同右岸では山麓で縄文土器等の遺物散布地が３箇所確認されているだけであり、谷底平野では遺跡は確認されていない。

表１　周辺の遺跡

№.	遺跡番号	遺跡名	種別	時代	遺構･遺物	所在地	備考
1	NF46-2272	本宿館(横田城)	城館跡	中世	空堀、主郭、二の郭、土塁	横田町字本宿	
2	NF46-1079	袋沢Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、フレーク、土師器 石鏃、石器	横田町字袋沢	
3	NF46-1089	袋沢Ⅱ	散布地	縄文	竪穴住居	横田町字袋沢	
4	NF46-2100	金成	散布地	縄文	打製石斧	横田町字金成	
5	NF46-1167	三日市館	散布地、城館跡	縄文、中世	縄文土器(中期)、空堀、郭	横田町字三日市	
6	NF46-1189	長徳寺	散布地	縄文	縄文土器、土師器	横田町字三日市	
7	NF46-1281	寺ノ沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	横田町字三日市	
8	NF46-1293	寺ノ沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	横田町字三日市	
9	NF46-2118	友沼	散布地	縄文	縄文土器、土師器、須恵器	横田町字友沼	H元調査
10	NF46-2214	山田	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	横田町字西宿	
11	NF46-2240	西宿	散布地	縄文、古代	縄文土器(中･晩期)、土師器	横田町字西宿	
12	NF46-2262	本宿	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	横田町字本宿	
13	NF46-2374	堂の沢	散布地	縄文	縄文土器	横田町字堂の沢	
14	NF56-0245	壷館(竹駒城、壺城)	城館跡	近世	空堀、主郭、腰郭	竹駒町字下壷	
15	NF56-0285	下壷Ⅱ	散布地	縄文	フレーク	竹駒町字下壷	
16	NF56-0266	壷	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	竹駒町字壷	
17	NF56-0340	下壷Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	竹駒町字下壷	
18	NF56-0304	上壷Ⅰ	散布地	縄文	土師器	竹駒町字上壷	
19	NF56-0315	上壷Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	竹駒町字上壷	
20	NF56-0388	北平	散布地	縄文	縄文土器	竹駒町字北平	
21	NF56-0395	新田Ⅰ	散布地	縄文	石鏃	竹駒町字新田	
22	NF56-0398	新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	竹駒町字新田	
23	NF56-1308	新田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器、壷、石鏃	竹駒町字新田	
24	NF57-0090	新田Ⅳ	散布地	縄文		竹駒町字新田	
25	NF57-1041	上細根	散布地	縄文、弥生		竹駒町字上細根	



第３図　周辺の遺跡

写真１　本宿館跡　付近の航空写真（上が北、1947 年米軍撮影（一部改変））

5　歴史的環境

本宿館跡について（第 4 図、写真図版 1）　本宿館跡は、南北を谷ではさまれた気仙川に面する丘陵の先端にある。東から西に下る尾根上の隆起を整形して東西二つの郭が形成されている。東側の郭が主郭で、その大きさは東西約 70m、南北約 100mで、標高は概ね 74mである。周囲に切岸と腰郭を伴う。西側の郭が副郭で、その大きさは東西約 80m、南北約 20mで、標高は概ね 60mである。西寄りには熊野神社があり、主郭との境には堀跡と土塁がある。北の谷に面する斜面は自然の急崖のままであるが、南の谷や気仙川に面する斜面の上位はひな壇状に造成されており、1970 年頃までは東側の郭も含め畑地であった。

調査・研究については、過去に紫桃（1972）や岩手県教委（1986）によって地表面観察に基づく縄張りの検討と古文書の記載による城主の推定がなされたが、発掘調査は行われていない。

縄張りについて、紫桃（1972）は以下のように捉えている。

1)　街道に直角に構える
2)　本丸跡は東西 100m、南北 30mの一面平坦な畑地で、西端は一段高く、熊野神社（望楼跡と推定：第 4 図・平面図①）との間には深い空堀が切られている
4)　本丸跡を中心に南面に四段ばかりの土壇がひらけるが、特に二段目が広い
5)　南面の緩い斜面に対し、北面は険しい断崖となる
6)　熊野神社の下に広い畑地（神社西側では土塁が存在：第 4 図・平面図①）があり、根小屋として使用された場所と推察される
7)　高さ 60m、東西 200m、南北 150mの、西面の街道側に構えた山城の一種といえる

また、岩手県教委（1986）は以下のように捉えている。

1)　熊野神社の境内が二の郭である
2)　神社東側に大きな空堀が切られ、その先が主郭となる
3)　主郭の二の郭側・南側にはわずかながら一段高い壇が付く
4)　主郭北面は本宿の沢に向かい急に傾斜するのに対し、南面は 3～4 段の腰廓状の壇がある
5)　熊野神社の参道下に広がる畑地には、土塁状の高まりも確認できる

城主については、ともに仙台藩が延宝年間（1673～81）に作成した「仙台領古城書上」に「城主日野右馬允」の記載があることを示し、土豪の葛西氏家臣の金野氏との関連を示唆している。

気仙金氏について　金氏系図によれば貞観十三年(871)、阿部兵庫之亟金為雄(ためかつ)が、京都で気仙郡司に補されて気仙に至り、金山開発の功によって「金」氏を賜ったという。金為雄は、気仙地方に在住した豪族の有力者の子弟であったものと思われる。郡司の役所を「郡家」と称するが、郡家は郡司の私宅に設けられるのが通例であった。そこで、金為雄の居館のあった所として古来、横田説と米崎説がある。

前九年の役(天喜四年 1056 年～康平五年 1062 年)で、下北方面の豪族で安倍一族であった安倍富忠は、金為時らの「甘言」に乗せられて離反し、奥地の俘囚勢を率いて従ったのである。これは源頼義が、夷族の事情に通じている金為時をして工作せしめたものという。気仙郡司金為時は、前九年の役の勝敗を決定づけるほどの重要な役割を担っていたことになる。

金氏系譜

金為雄―為秀―秀長―吉連―為定―祐吉―為時―為家―宗高―時盛―為俊

（米崎町金家より）

気仙の金氏は源頼朝の平泉征伐（文治五年 1189 年）の折りには、平泉側に立って戦い、金秀時は戦死、子の為俊は山中に隠れていたが、翌年の藤原泰衡の遺臣大河兼任の反乱に際しては、鎌倉側に属して功績をあげ、郡司の地位を回復した。金氏の本拠は、「横田本宿館」といわれているが、戦国時代になると、千葉氏の勢力に押されて衰退する。

気仙郡安倍姓金氏系図

金秀時―為俊―定俊┬定国
　　└時俊―俊長―俊清　　（東磐井郡大原町金家より）

気仙郡には古来から安倍姓の金氏がおり、郡司を世襲していた。しかし、金右近太夫俊長（元徳二年 1330 年没）を最後に郡司の名は系譜からも消えている。そして俊長―俊清―俊継と続き、その嫡系の家は不明となっている。金兵庫助俊継の弟右馬允定俊は、正平七年（文和元年 1352 年）磐井郡千厩邑に采地三百町を与えられ、ここに移った。この地の金野氏の祖になったという。気仙の金氏は、南北朝から室町時代にかけての時期に、いくつかに分家したものと思われる。

（「陸前高田市史第三巻」より）

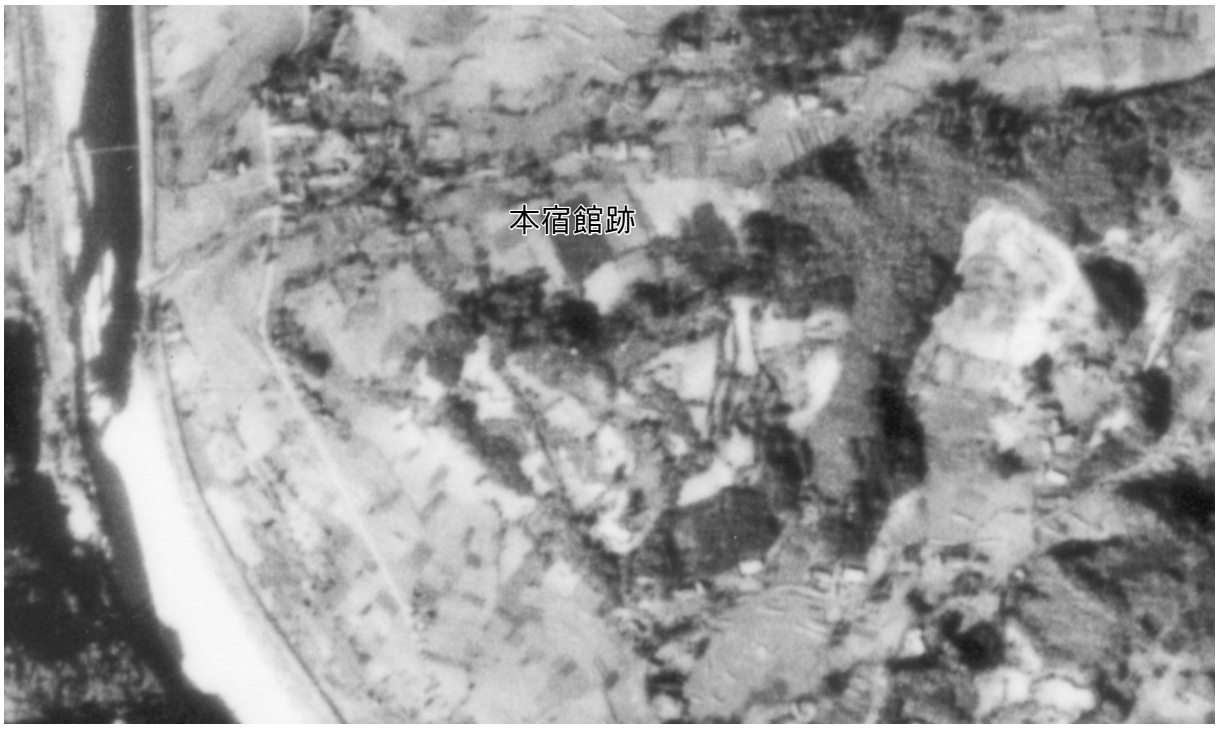
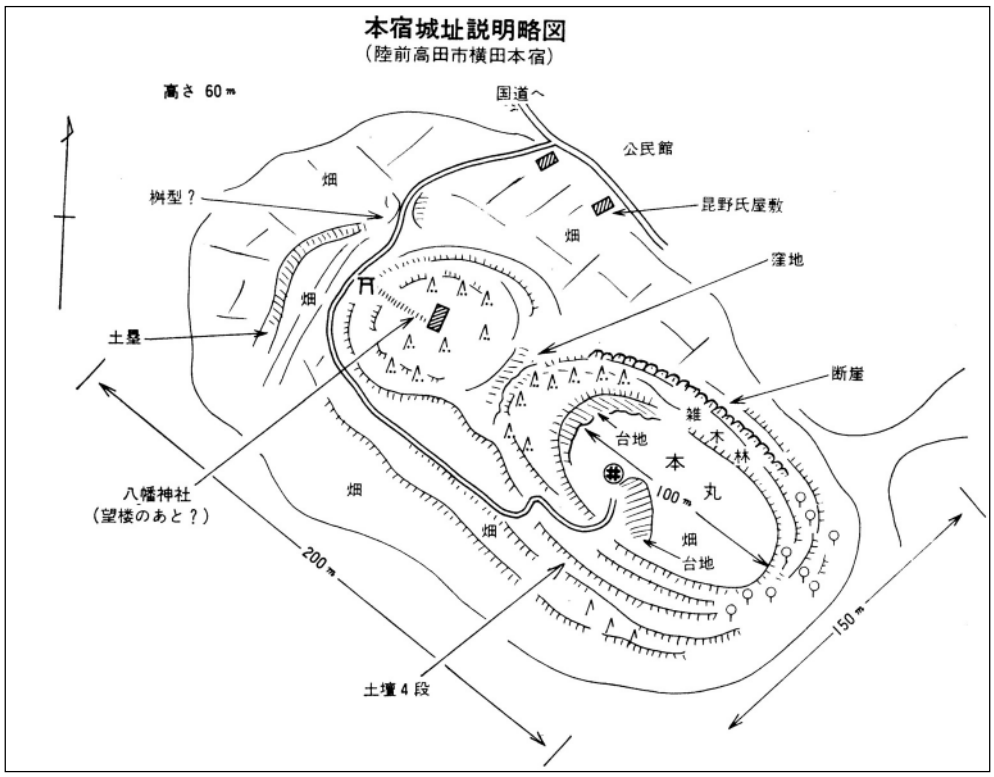
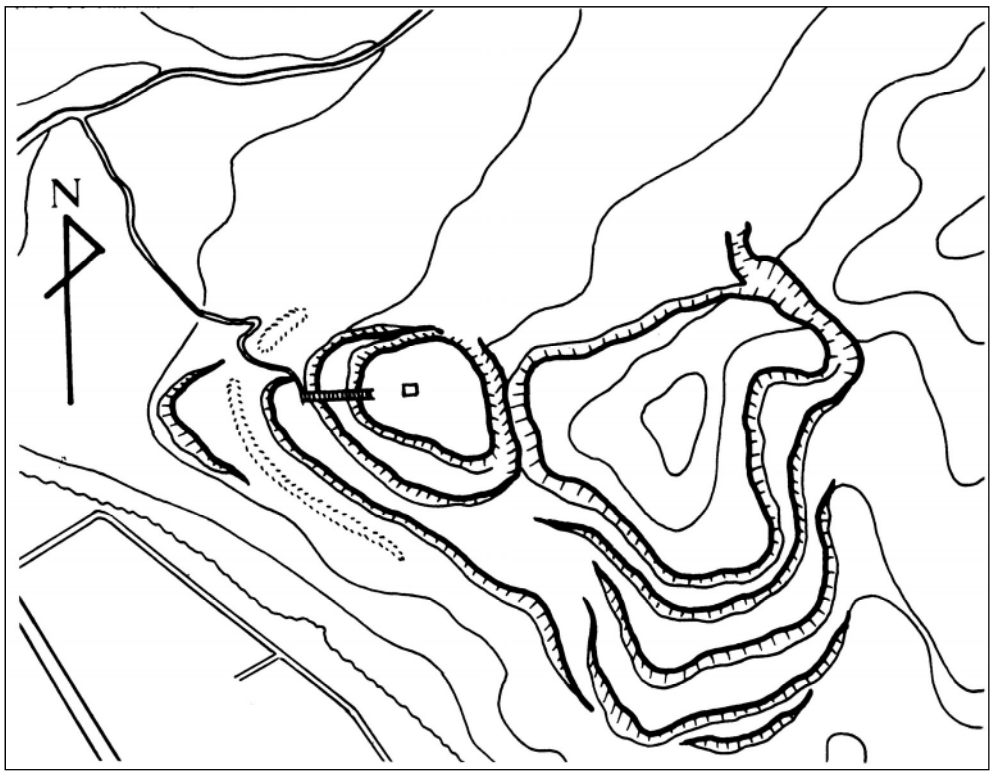


写真２　本宿館跡　航空写真（上が北、1947 年米軍撮影（一部改変））



平面図①（紫桃正隆 1972 による）



平面図②（岩手県教育委員会 1986 による）

第４図　本宿館跡平面図

Ⅲ　調査と整理の方法

１．測量基準点の設置

測量基準点は、平成 22 年度の調査の際に株式会社菊池技研コンサルタントに委託し、計 3 点を設置した。得られた座標値（世界測地系）と水準値は、以下のとおりである。

基準点１：　（X、Y）＝（－104,439.362、65,977.022）　標高：※51.815m

基準点２：　（X、Y）＝（－104,468.848、66,000.022）　標高：※57.070m

基準点３：　（X、Y）＝（－104,459.639、65,976.411）　標高：※51.953m

その後､標高については国土地理院や陸前高田市が作成した地形図と齟齬があることを確認し、陸前高田市教育委員会が平成 25 年 12 月 5 日に再測を行った｡起点は近くにある堂の沢 4 等三角点（標高 69.1m）で、T－1 直近の地盤（基準点は消失）を測点とした。その結果、平成 22 年度測量時の数値(※印)が 9.6m低いことを確認した。以下のように修正する。

基準点１：　61.4m　　基準点２：　66.7m　　基準点３：　61.6m

２．グリッドの設定（第８図）

グリッドは、事業地北東の（X、Y）＝（－104,430.71、65,994.81）※1を原点（A－１）とし、ここからW26°15′26″S※2で西に向かう東西基準線と、これに直交して南に向かう南北基準線に基づき、５m四方を一単位として設定した。グリッド線の名称については、東西の線は北から南に向かってA・B・C・・・(アルファベット)、南北の線は東から西に向かって１・２・３・・・(数字）とし、その交点に設置したグリッド杭の名称は、これらをハイフン（－）でつないで「A－１」のように命名した。グリッド名は、北東のグリッド杭名とした。

※１・２：　1/20 平面図のグリッド杭の位置関係から求めた(安井)

３．表土除去、遺構検出・掘削

表土除去　平成 22 年度の調査では、すべて人力で行い、平成 23 年度の調査では、土塁の西側に設定した調査区で小型のバックホウを使用した。

遺構検出・掘削　遺構面及び遺構の検出作業、土坑等の遺構の掘削作業は、平成 22・23 年度とも人力で行った。しかし、土量の多い堀のサブトレンチの掘削と土塁の除去には小型のバックホーを使用した。なお､小土坑は基本的に埋土を半裁して断面観察･記録を行った後に完掘した。

４．遺構番号

現地調査時には、複数検出した小土坑と土坑について、グリッドに関係なく種別ごとに通し番号を付けた。このうち小土坑は年度ごとに番号を付けており、平成 22 年度の調査で検出したものはＳＰ１～、同 23 年度の調査で検出したものはＳＰ101～とした。

５．記録作成（写真・図面）

調査図面は、1/20 の調査区平面図、土層断面図を割付により、また 1/100 の調査区平面図を

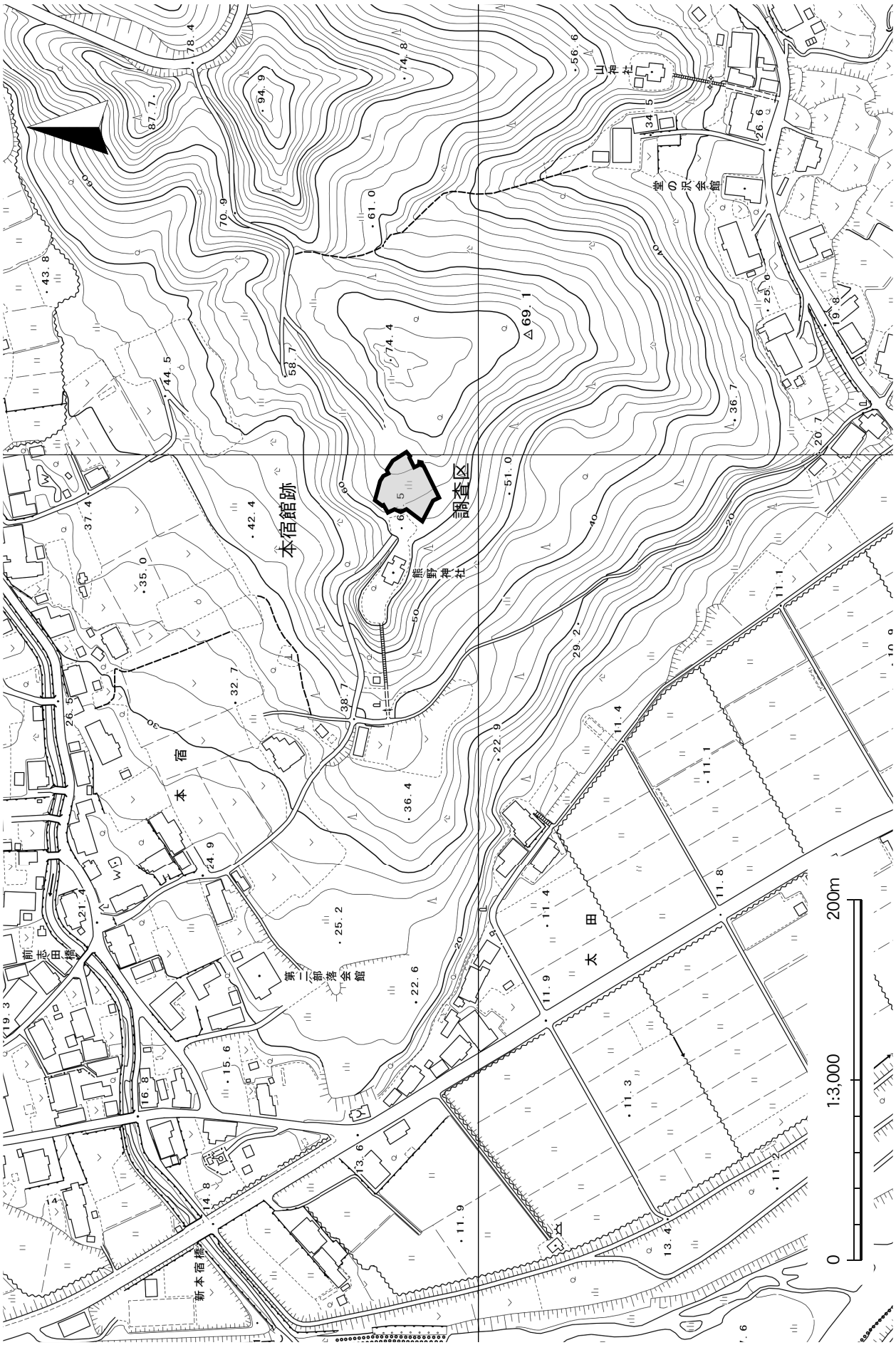
平板測量により作成した。記録写真は、35 ミリカメラ(モノクロ・カラーリバーサル)とデジタルカメラで撮影した。また、平成 22 年度に、ラジコンヘリコプター(デジタルカメラ搭載)による空中写真、空中写真測量図化による調査区平面図(1/20、1/50) を株式会社菊池技研コンサルタントに委託し作成した。

６．記録（写真・図面）の整理

平成 22 年度　株式会社菊池技研コンサルタントに委託して作成した基準点測量手簿、空中写真と調査区平面図については、原本が被災せずに無事保管されていたので、平成 25 年度に成果品の作成を再度依頼した。空中写真と調査区平面図はデジタルデータがあり、ＣＤ化している。

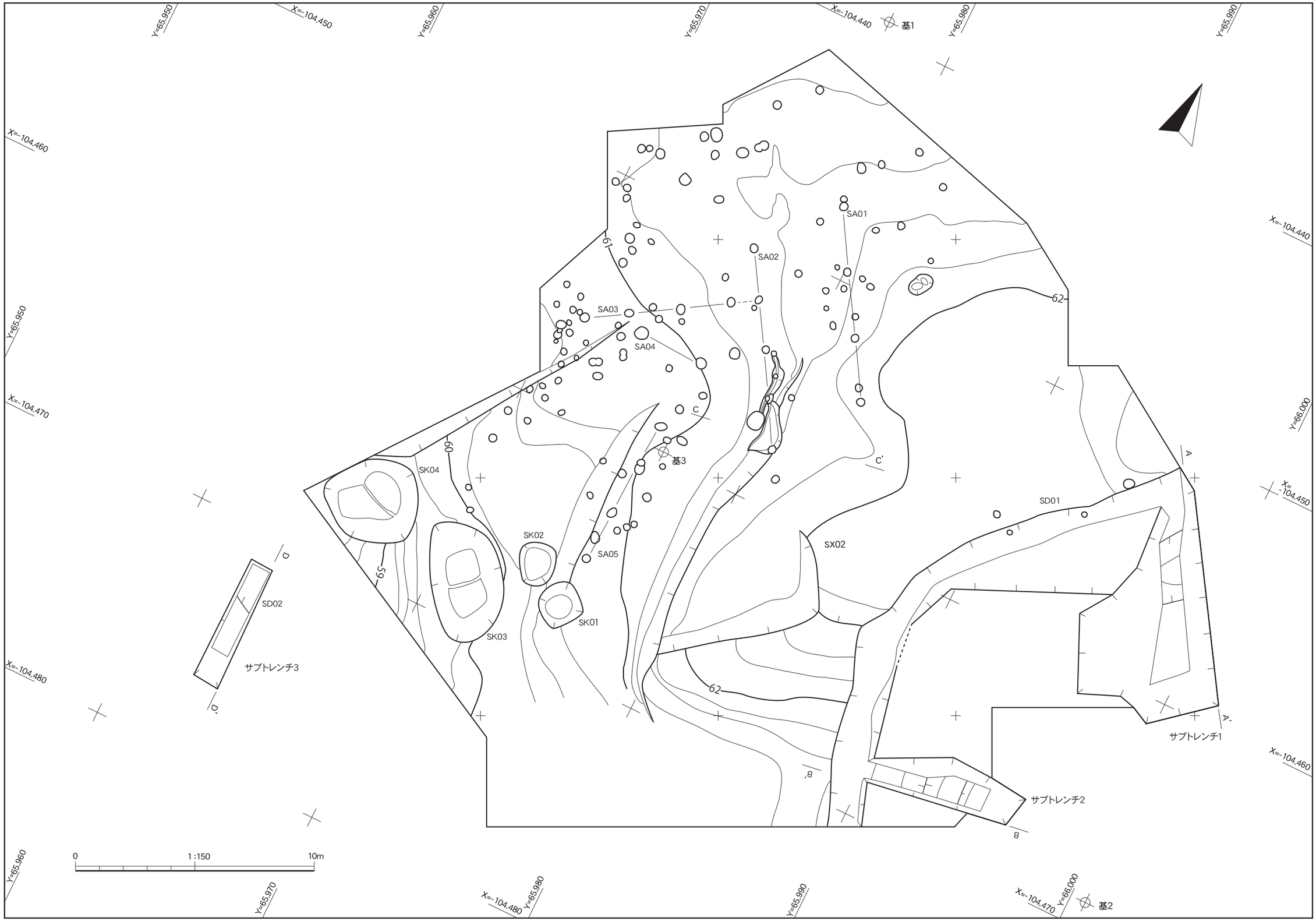
平成 23 年度　35 ミリカメラで撮影したフィルムは、種類ごとに撮影日順にアルバムに収納した。撮影内容については台帳（Excel データ）で検索できるようにした。デジタルカメラのデータは、撮影日順に並べてタイトルを付けた。デジタルデータはＨＤＤに保存している。

現場で作成した図面は、補筆・修正を行ったうえで専用のフォルダーに収納した。また、調査終了後に作成した全体図（1/100）も、同じフォルダーに収納した。

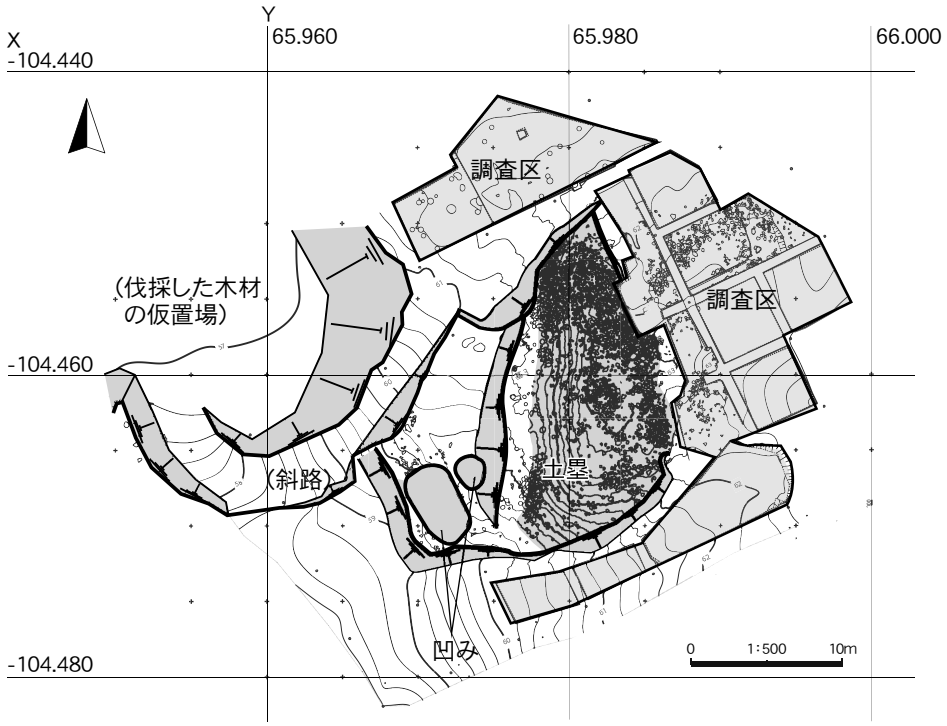


第５図　調査区位置図

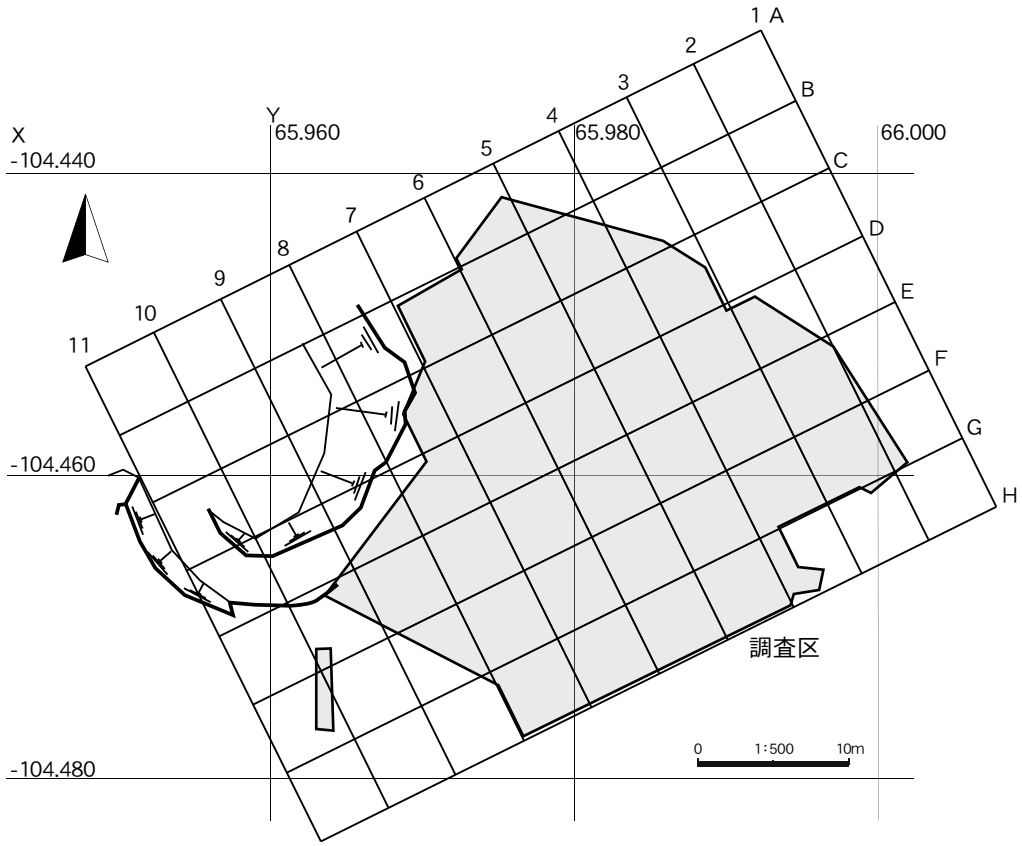
第6図 調査区平面図1(2010年)



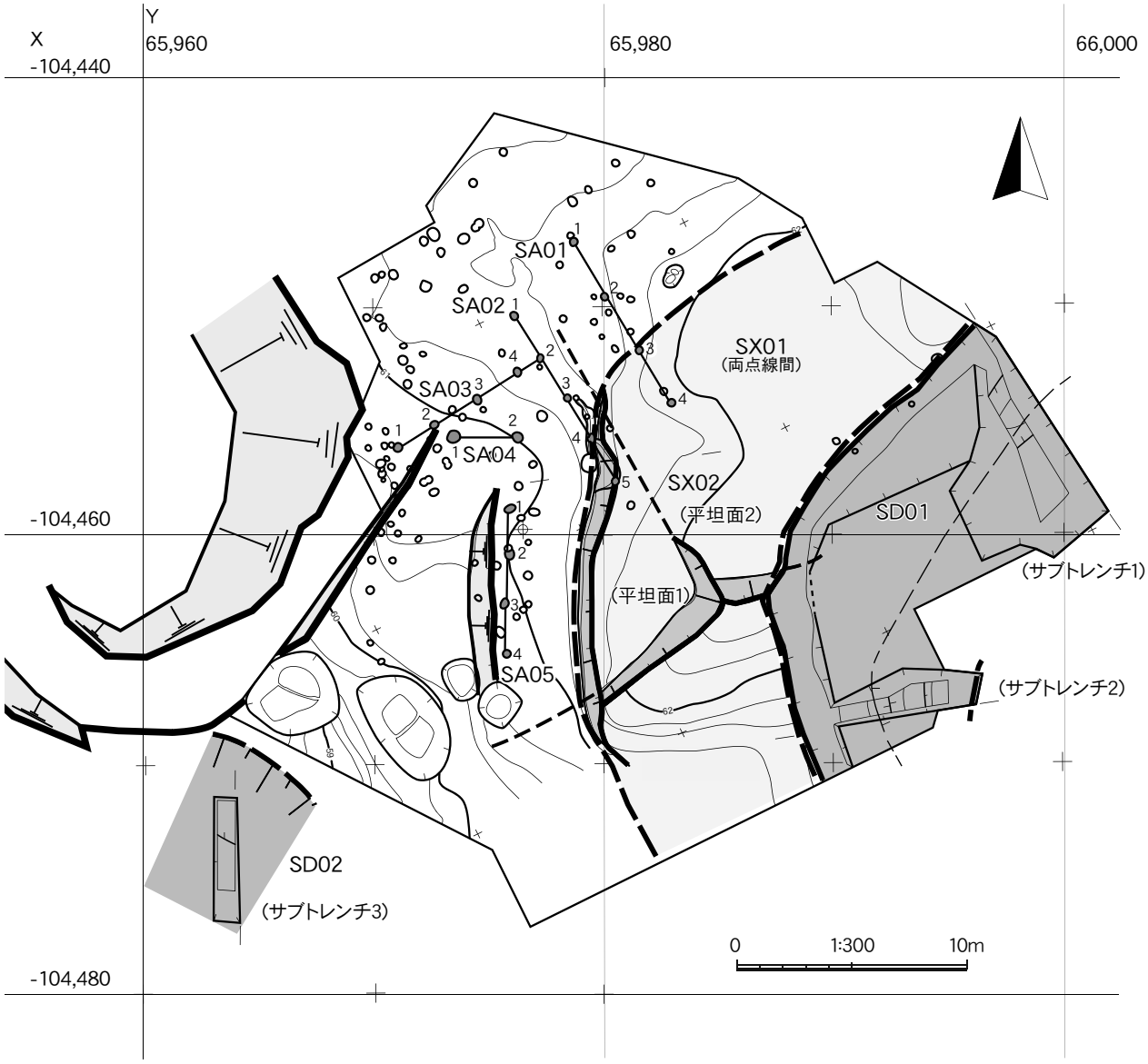
第7図 調査区平面図1(2011年)



調査地状況（2010 年）



調査区とグリッド設定（2011 年）
第８図　調査区とグリッド設定


Y
X
65,960
65,980
66,000
-104,440
-104,460
-104,480
SA01
SA02
SA03
SA04
SA05
SX01
(両点線間)
SX02
(平坦面2)
(平坦面1)
SD01
(サブトレンチ1)
(サブトレンチ2)
SD02
(サブトレンチ3)
0
1:300
10m

第９図　検出遺構平面図

Ⅳ　調査成果

1　検出遺構（第 6～12 図、写真図版 2～8）

遺構検出は、遺構面である地山と土塁の盛土の上面、及び土塁の盛土直下の地山上面で行い、堀 2 条（ＳＤ01・02）、土塁 1 基（ＳＸ01）、区画の一部（ＳＸ02）、小土坑群、掘立柱列 5 列（ＳＡ01～05）を検出した。

(1)　堀　ＳＤ01（図版 7・9・10 図、写真図版 4）

主郭北西隅の切岸に沿って弧状に掘削された堀である。2 か所のサブトレンチ（調査区東辺：1、同南辺:2）を掘削し、地山の掘削面の形状や埋土の層序・収れん部の残り具合をもとに掘形の形状と埋没過程を検討した結果、Ａ～Ｃの 3 時期の堀が重複すると考えられる。

ＳＤ01－Ａ　最も新しい時期のものである。箱堀で、主郭寄りに掘削されている。

サブトレンチ１（土層は第 10 図 A-A’）では、北側の肩から 4.2m南までを確認した。深さ 1.1mで、底面の標高は61.4m。埋土は、人為的に掘削した面を反映する垂直または水平な層界と土層の収れん部の残り具合から、埋没の進んだ掘形内を掘り直した部分を埋める①・②、掘形内の当初の埋土である③の 3 つのユニット（土層のまとまり）が識別できた。その様相は以下のとおりである。

①（第 10 図 A-A’9 ～ 17 層）　黄褐色や褐色の礫混じりシルト層からなる。11 ～ 14 層は、層理が南上方から北下方に斜行する。層序から後述の②・③より新しく、両ユニットとの層界は一連である。

②（第 10 図 A-A’18 層）　黄褐色のシルト混じり礫層で、層序から後述の③より新しい。

③（第 10 図 A-A’19・20 層）　炭化物を含む黄褐色のシルト混じり礫層からなり、上位の収れん部を欠く。19 層は下位の収れん部も欠き、18 層との層界が垂直に近い。層理が北上方から南下方に斜行する。

サブトレンチ 2（土層は第 10 図 B-B’）では、掘形全体を確認した。幅 4.3 m、深さ 1.1 mで、底面の標高は 60.9 m。埋土は、サブトレンチ１と同じ観点から、埋没の進んだ掘形内を掘り直した部分を埋める①～③、掘形内の当初の埋土である④の 4 つのユニットが識別できた。その様相は以下のとおりである。

①（第 10 図 B-B’1 ～ 5 層）　黄褐色や褐色の礫混じりシルト層やシルト混じり礫層からなる。層序から後述の②～④より新しく、③・④との層界が一連である。1 ～ 3 層の層理は水平である。4 層は層理が西上方から東下方に斜行する。

②（第 10 図 B-B’6 ～ 8 層）　黄褐色や褐色の小石あるいは礫混じりシルト層からなる。層序から後述の④よりも新しい。6 層下位の収れん部を欠き、5 層との層界が垂直に近い。層理が西上方から東下方に斜行する。

③（第 10 図 B-B’9・10 層）　黄褐色や褐色の小石あるいは礫混じりシルト層からなる。層序から後述の④より新しい。層理は水平である。

④（第 10 図 B-B’11 ～ 16 層）黄褐色や褐色の礫混じりシルト層やシルト混じり礫層からなる。11・12 層は下位の収れん部を欠き、前者は 3 層、後者は 5 層との層界が垂直に近い。14 層も前述の③との層界が垂直に近い。11・12 層は層理が東上方から西下方に斜行する。

サブトレンチ１・２で確認したユニットの対応関係は以下のとおりで、少なくとも３回は掘り直されたことがうかがえる。

サブトレンチ１－①　－　　サブトレンチ２－①・②

サブトレンチ１－②　－　　サブトレンチ２－③

サブトレンチ１－③　－　　サブトレンチ２－④

ＳＤ01－Ｂ　前述のＡよりも副郭寄りに掘削されている箱堀で、重複関係からＡより古く、後述するＣより新しい。主郭寄りの部分がＡの掘削により破壊されている。

サブトレンチ１では、掘形は南壁の上位を欠くが、残存状態から本来の幅は3m程度と推定する。深さ1.5mで、底面の標高は61.0m。埋土は、主に黄褐色や褐色の小石あるいは礫混じりシルト層からなる。26～30層は、層理が北上方から南下方に斜行する。

サブトレンチ２では、掘形は東壁の上位を欠くが、残存状態から本来の幅は2.5m程度と推定する。深さ1.2mで、底面の標高は60.8m。埋土は基本的にサブトレンチ１と同様であるが、下位に流水成とみられるシルト・砂ラミナの互層（図中26層）と滞水成とみられる暗色のシルト層（図中27層）がある。19～28層は、層理が西上方から東下方に斜行する。

ＳＤ01－Ｃ　最も古い時期のもので、前述のＢよりも副郭寄りに掘削されている。主郭寄りの部分がＢの掘削により破壊されている。箱堀であるが、底面の幅は狭い。

サブトレンチ１では、掘形は南寄りが破壊されているが、残存状態から本来の幅は8.5m程度と推定する。深さ2.4mで、底面の標高は60.1m。埋土は、層相の違いから、埋没の進んだ掘形内を掘り直した部分を充てんする①､掘形内の当初の埋土である②の２つのユニットが識別できた。その様相は以下のとおりで、ともに層理は水平に近い。

①（第10図A-A’33～45層）　炭粒を含む黄褐色や褐色の礫混じりシルト層やシルト混じり礫層からなる。層序から後述のユニット２より新しい。

②（第10図A-A’46～55層）　黄褐色や褐色の礫混じり粘土質シルト層やシルト混じり礫層からなる。炭粒は含まない。47・48層は掘形の北壁沿いでわずかにみられる。

サブトレンチ２では、掘形は東寄りがかなり破壊され、西肩から2.5ｍ東までが残る。深さ2.4ｍで、底面の標高は60.9ｍ。埋土は、層相の違いから①・②の２つのユニットが識別できた。

①（第10図B-B’29層）　　炭粒を含む黄褐色の礫層からなる。

②（第10図B-B’30～32層）　黄褐色のシルト質砂層で炭粒を含まない。

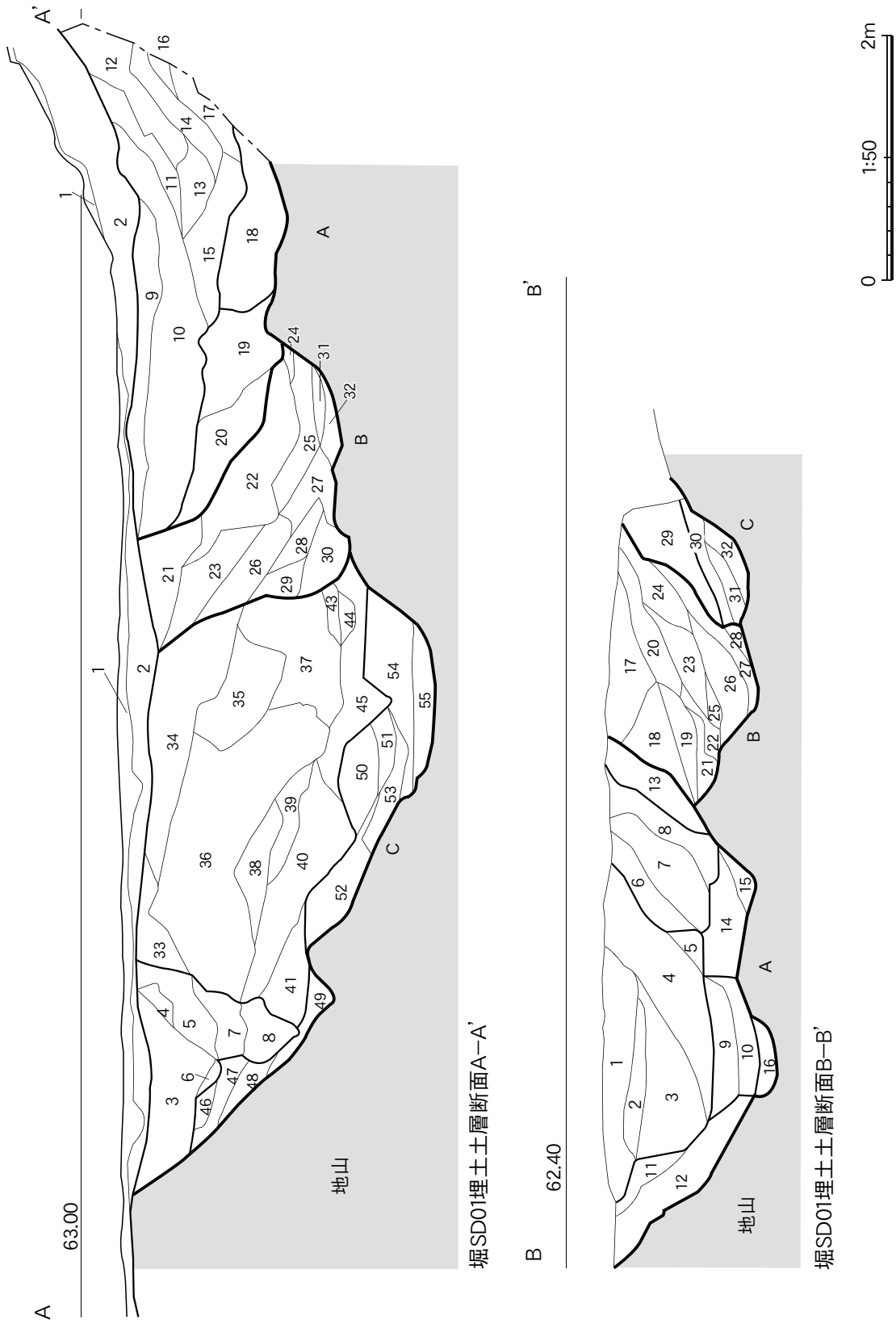
サブトレンチ１・２で確認したユニットの対応関係は以下のとおりで、少なくとも１回は掘り直されたことがうかがえる。

サブトレンチ１－①　－　　サブトレンチ２－①

サブトレンチ１－②　－　　サブトレンチ２－②

ＳＤ01－Ａ～Ｃの埋土には､層理が掘形の側面に沿って斜行する層と水平な層がある｡前者は、掘形の肩部が切岸や土塁に接することをふまえれば、主に斜面の崩落土と考えられる。Ａ～Ｃでみられたユニット・層の土砂の供給源を以下のように推察する。

主郭の切岸：　Ａ－サブトレンチ１の①（11～14層）



第 10 図　堀土層断面図

主郭の切岸：　Ａ－サブトレンチ１の①（11～14 層）

土塁ＳＸ01：　Ａ－サブトレンチ１の③、サブトレンチ２の①（4 層）・②

Ｂ－サブトレンチ１の 26～30 層、サブトレンチ２の 19～28 層

後者は、土塁の崩落土の他、人為的な切り崩し等の可能性も考えられる。

なお、ＳＤ01－Ａ～Ｃの埋土中や掘形上面から遺物は出土しなかった。

(2)　堀　ＳＤ02（図版 7・9 図、写真図版 4）

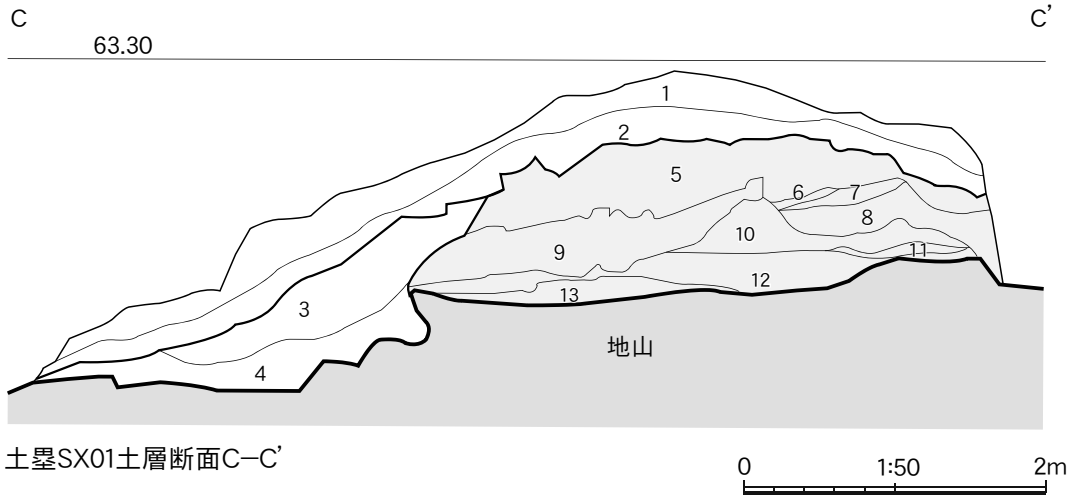
副郭の南縁を画する堀で、調査地の南西隅に設定したサブトレンチ３で確認し、底面の検出と埋土の観察を行った。南・北両肩は確認できなかったが、北肩の位置は地山上面の検出状態からみて、近接する調査区南壁のやや南寄りと想定される。

検出した底面は近くの地山上面から約 2～3m低く、南から北に緩やかに下る。その標高は 55.8～56.8mで、前述のＳＤ01 より約 4～5m低い。埋土の観察記載はないが、写真では前述のＳＤ01 と同様の黄褐色や褐色の礫混じりシルト層やシルト混じり礫層であることが読み取れる。埋土中や掘形上面から遺物は出土しなかった。

(3)　土塁　ＳＸ01（図版 6～9・11、写真図版 5）

堀ＳＤ01 の副郭側の肩に沿って築かれた幅約 9mの土塁で、北・南寄りと北半東寄りは畑地や山林の造成の際に削平され、約 20m分が残っていた。

副郭側の地山を削って基底部を形成し、その上に盛土を行って構築されている。盛土は主に前述の堀ＳＤ01－Ａ～Ｃの埋土にもみられる褐色のシルト層や粘土質シルト層からなり、基底部裾の地山上面から約 1.5m上（標高 62.8m）まで残る。副郭側の斜面に堆積する黄褐色や褐色のシルト質砂層は、崩落土とみられる。盛土中や基底部上面から遺物は出土しなかった。



第 11 図　土塁土層断面図

表２　遺構埋土土層注記１

堀SD１ A－A’

層番号	層相 色調	層相 岩相・包含物	層相 しまり	層の区分	
1	10YR2/2(黒褐)	砂質シルト層	無	表土	
2	10YR3/3(暗褐)	砂質シルト層、上位に花崗岩小礫を含む	やや有		
3	10YR2/3(黒褐)	砂質シルト・礫層	無	礫の集積部(後世の撹乱の可能性)	
4	10YR3/4(暗褐)	砂質シルト層、黄色土粒と微量の炭化物含む	やや有		
5	10YR3/3(暗褐)	シルト・礫層、黄色土粒と微量の炭化物含む	無		
6	10YR4/4(褐)	シルト層、黄色土粒含む	有		
7	10YR4/4(褐)	シルト・礫層、黄色土小塊含む、微量の炭化物含む(1cm大粒有り)	無		
8	10YR3/4(暗褐)	シルト・礫層	無		
9	10YR4/6(褐)	シルト・黄色土層、炭化物無	有	①	SD01－Aの埋土
10	10YR3/4(暗褐)	シルト・小礫層、微量の炭化物が全体に入る	やや有		
11	10YR4/4(褐)	シルト層、花崗岩小礫を含む、微量の炭化物含む	やや有		
12	10YR5/4(にぶい黄褐)～5/6(黄褐)	黄色土混じりシルト層、黄色小石含む	やや有		
13	10YR5/8(黄褐)	粘土質シルト・黄色土層、炭化物無	無		
14	10YR4/4(褐)	シルト層、小礫・小石含む、微量の炭化物含む(5mm大粒でまばらに入る)	やや有		
15	10YR5/6(黄褐)	シルト層、小礫含む、炭化物無	無		
16	10YR5/4(にぶい黄褐)～5/6(黄褐)	砂質シルト層、炭化物無	無		
17	10YR4/4(褐)	シルト層、微量の炭化物含む	無		＊ユニット
18	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト・中～大礫層、微量の炭化物含む(大粒有)	無	②	①・②:掘り直した部分
19	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト・小～中礫層、微量の炭化物含む	無	③	③:当初
20	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト・小石～小礫層、黄色小石含む、微量の炭化物含む	有		
21	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト・中～大礫層	やや有	SD01－Bの埋土	
22	10YR4/4(褐)	シルト層、小石～小礫含む、微量の炭化物含む(大粒有)	有		
23	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト層、まばらに小石～小礫含む、微量の炭化物含む	有		
24	10YR4/4(褐)	粗砂混じりシルト層、花崗岩小石含む、微量の炭化物含む	やや有		
25	10YR4/3(にぶい黄褐)	粗砂混じりシルト層、小石と小礫を含む、微量の炭化物含む(全体に状に入る)	やや有		
26	10YR4/4(褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫含む、～3mm大の黄色小石が全体に混じる微量の炭化物含む	有		
27	10YR5/4(にぶい黄褐)	シルト混じり粗砂層、小石、花崗岩小礫含、炭化物粒状に全体に入る	有		
28	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト層、花崗岩小礫含む、微量の炭化物含む	有		
29	10YR4/4(褐)	シルト層、花崗岩小礫含む、黄色小石全体に混じる、微量の炭化物含む	有		
30	10YR6/6(明黄褐)～6/8(明黄褐)	粘土質シルト層、花崗岩のくさり礫の小石を含む	有		
31	10YR5/4(にぶい黄褐)	粗砂層、～2cm大の黄色小石が全体に混じる	無		
32	10YR7/4(にぶい黄橙)	風化した花崗岩、粒子が細かいサラサラした土質	有		
33	10YR3/4(暗褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫が入る、微量の炭化物が粒で入る、	やや有	①	SD01－Cの埋土
34	10YR4/4(褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫が入る、黄色小石が全体に入る、微量の炭化物が粒で入る	やや有		
35	10YR4/4(褐)	砂質シルト・花崗岩中～大礫層、黄色小石が全体に入る、微量の炭化物が粒で入る	有		
36	10YR4/4(褐)	砂質シルト・花崗岩中礫層、黄色小石が全体に入る、微量の炭化物が粒で入る	有		
37	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト層、花崗岩小礫が入る、黄色小石が全体に入る、微量の炭化物含む(1cm大粒有り)	有		
38	10YR4/6(褐)	シルト層、花崗岩小～中礫が入る、黄色小石、黄色土粒が全体に入る微量の炭化物含む	有		
39	10YR4/4(褐)	シルト層、花崗岩大礫が入る、微量の炭化物含む	やや有		
40	10YR4/6(褐)	シルト・花崗岩大～中礫層、微量の炭化物含む	やや有		
41	10YR4/6(褐)	シルト層、小・中礫と黄色小石入る、微量の炭化物含む	有		
43	10YR4/3(にぶい黄褐)	小石混じり粗砂層、炭化物無	有		
44	10YR4/3(にぶい黄褐)	粗砂混じりシルト・小石混じり花崗岩小礫層、炭化物無	有		
45	10YR3/3(暗褐)	シルト・小礫層、微量の炭化物含む	有		
46	10YR4/6(褐)	粘土質シルト・小礫層	有	②	＊ユニット ①:掘り直した部分 ②:当初
47	10YR4/4(褐)	粘土質シルト・小礫層	有		
48	10YR4/6(褐)	粘土質シルト層	有		
49	10YR4/6(褐)	粘土質シルト・中礫層	有		
50	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト層、小礫含む	有		
51	10YR4/6(褐)	粗砂・小石層	やや有		
52	10YR5/6(黄褐)	粘質シルト・小石混じり小礫層、炭化物無	有		
53	10YR5/4(にぶい黄褐)	シルト層、小礫含む、炭化物無	有		
54	10YR3/4(暗褐)	シルト・花崗岩小礫層、下部粗砂が多くなる	やや有		
55	10YR6/6(明黄褐)	粗砂(地山起源)層、花崗岩有り	無		

表3 遺構埋土土層注記2

堀SD 01 B－B’

層番号	層相 色調	層相 岩相・包含物	層相 しまり	層の区分	
1	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫含む	無	①	SD01－Aの埋土 ＊ユニット ①～③:掘り直した部分 ④:当初
2	10YR4/6(褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫含む、黄色土塊・小石含む	無		
3	10YR4/4(褐)	砂質シルト・礫層、大礫を含む	無		
4	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト・礫層、大礫を含む	無		
5	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト層、中礫含む、微量の黄色小石含む	有		
6	10YR4/4(褐)	砂質シルト層、小石含む、微量の黄色小石含む	有	②	
7	10YR4/4(褐)	砂質シルト・中礫層、大礫も含む	やや有		
8	10YR5/4(にぶい黄褐)	砂質シルト層、小石含む	やや有		
9	10YR4/4(褐)	シルト層、小礫少し含む	やや有	③	
10	10YR5/4(にぶい黄褐)	砂質シルト層、小石含む、黄色土塊を含む	やや有		
11	10YR5/6(黄褐)	シルト質砂層	無	④	
12	10YR4/4(褐)	シルト質砂・花崗岩中礫層	無		
13	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト・小礫層、微量の炭化物含む	有		
14	10YR3/3(暗褐)	砂質シルト・礫層、大礫を含む	無		
15	10YR4/6(褐)	シルト層、大型礫を含む	無		
16	10YR5/4(にぶい黄褐)	シルト質砂層、小礫含む、微量の炭化物含む	やや有		
17	10YR3/4(暗褐)	砂質シルト層、花崗岩小～中礫を含む	有		SD01－Bの埋土
18	10YR4/4(黄褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫と黄色小石を含む	有		
19	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト層、花崗岩小石を含む	有		
20	10YR5/6(黄褐)	砂質シルト層	無		
21	10YR5/4(にぶい黄褐)	砂質シルト(斑状)	有		
	10YR4/4(黄褐)	砂質シルト(斑状)			
22	10YR2/2(黒褐)	シルト層、粘性強い、微量の炭化物含む	やや有		
23	10YR4/4(黄褐)	砂質シルト層、少量の黒色土粒が入る、微量の炭化物含む	やや有		
24	10YR4/3(にぶい黄褐)	砂質シルト・花崗岩中礫層	無		
25	10YR6/6(明黄褐)	粗砂混じりシルト質砂層、小石を含む	無		
26	10YR5/6(黄褐)	粗砂ラミナ(複数)	有		
	10YR3/3(暗褐)	砂質シルトラミナ(複数)			
27	10YR3/2(黒褐)	シルト層	有		
28	10YR4/4(黄褐)	砂質シルト層、花崗岩小礫を含む	無		
29	10YR4/3(にぶい黄褐)～4/4(黄褐)	中型泥岩と花崗岩小礫が入る、黄色小石がポツポツ入る、微量の炭化物(1cm大の粒)含む	無	①	SD01－Cの埋土 ＊ユニット ①:掘り直した部分 ②:当初
30	10YR5/6(黄褐)	粗砂混じりシルト質砂層、花崗岩のくさり礫と粒が入る	有	②	
31	10YR5/4(にぶい黄褐)	シルト質砂層、花崗岩のくさり礫が入る	有		
32	10YR5/6(黄褐)	シルト質砂層、花崗岩入る	有		

土塁SX 01 C－C’

層番号	層相 色調	層相 岩相・包含物	層相 しまり	層の区分
1	10YR3/3(暗褐)	シルト質砂層、礫多く含む	無	表土
2	10YR4/3(にぶい黄褐)	シルト質砂層	やや有	
3	10YR4/4(褐)	シルト質砂層	有	斜面堆積物
4	10YR5/4(にぶい黄褐)	シルト質砂層	有	
5	10YR4/6(褐)	砂質シルト層	無	土塁盛土
6	10YR2/2(黒褐)	シルト層	無	
7	10YR3/3(暗褐)	粘土質シルト層	無	
8	10YR2/2(黒褐)	シルト層	無	
9	10YR4/4(褐)	シルト質砂層、礫多く含む	やや有	
10	10YR3/4(暗褐)	シルト層	無	
11	10YR4/6(褐)	粘土質シルト層	有	
12	10YR4/6(褐)	粘土質シルト層	有	
	10YR3/4(暗褐)	粘土質シルト層	有	
13	10YR5/6(黄褐)	粘土質シルト層	有	

(4)　区画　ＳＸ02（第７・９図、写真図版３下）

尾根の北寄りを稜線沿いにひな壇状に造成した区画の一部で、土塁ＳＸ01 基底部の地山上面で検出した。重複関係からＳＸ01 より古い。

検出したのは南寄りの部分で、西落ちの段差を介して南辺をそろえて連なる平面方形とみられる平坦面２面（西：平坦面１、東：平坦面２）と、それらの南縁を画する北落ちの法面からなる。平坦面の上面の標高は、平坦面１が概ね 61.9m、平坦面２が概ね 62.2m。北落ちの法面の方向は概ねW38°40′Ｓで、西落ちの段差の方向はこれと直交する。

(5)　小土坑群（第６・７・９図、写真図版６・７）

小土坑は 100 基ほどあり、大半が土塁ＳＸ01 の西側に分布する。概して径 0.4m前後の平面円形で、深さは 0.2～0.6m。底面の標高は、西寄りのものが 60.2～61.0m、東寄りのものが 61.2～61.6m。後述の掘立柱塀ＳＡ01～05 が識別できたことから、建物や塀の柱穴を含むことは間違いなく、柱痕跡を残すものもある。遺物は出土しなかった。

(6)　柱穴列　ＳＡ01（第７・９・12 図）

塀とみられる３間（8.4m）の掘立柱列。柱間寸法は 2.8m等間で、構成する柱穴の形状等は下記の表のとおりである。柱筋の方向はＮ30°30′Ｗで、区画ＳＸ02 の西落ちの段差とほぼ同様である。位置関係から平坦面２に伴う可能性が高い。重複関係から土塁ＳＸ01 より古い。

柱穴№	1	2	3	4
平面形	円形	円形	円形	円形
径（m）	0.3	0.3	0.3	0.3
深さ（m）	0.3	0.2	0.4	0.5
底面の標高（m）	61.2	61.6	61.2	61.2
柱痕跡（径：cm）	―	―	あり（10）	―

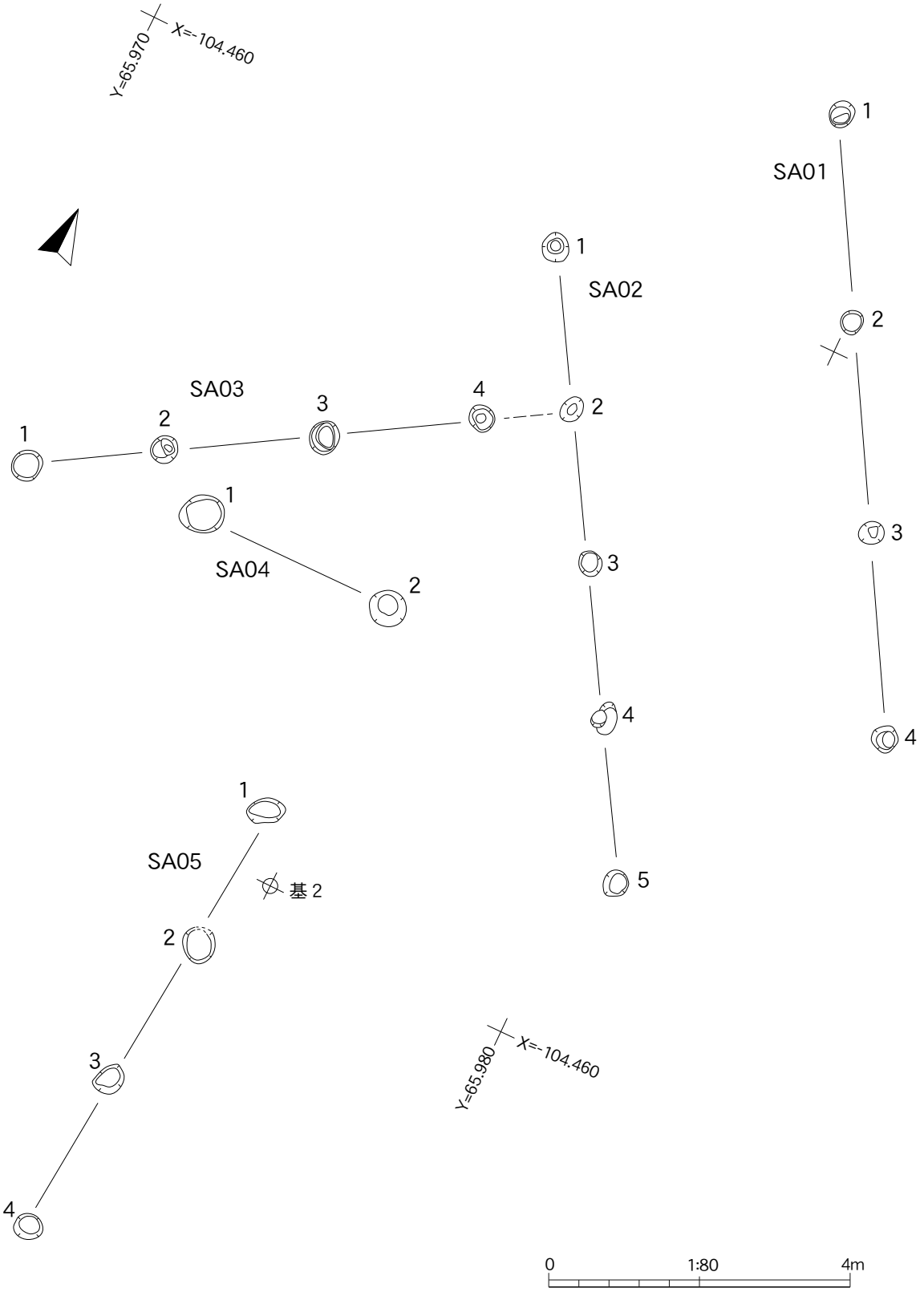
(7)　柱穴列　ＳＡ02（第７・９・12 図）

塀とみられる４間（8.4m）の掘立柱列。柱間寸法は 2.1m等間で、構成する柱穴の形状等は下記の表のとおりである。柱筋の方向はＮ32°Ｗで、区画ＳＸ02 の西落ちの段差とほぼ同様である。位置関係から平坦面１に伴う可能性が高い。重複関係から土塁ＳＸ01 より古い。

柱穴№	1	2	3	4	5
平面形	円形	円形	円形	円形	円形
径（m）	0.4	0.3	0.3	0.4	0.3
深さ（m）	0.4	0.2	0.3	0.6	0.6
底面の標高（m）	61.0	61.1	61.0	60.5	60.9
柱痕跡	―	―	―	―	―

(8)　柱穴列　ＳＡ03（第７・９・12 図）

塀とみられる４間（7.2m）の掘立柱列で、ＳＡ02 の柱穴№2 に接続する。柱間寸法は西から 1.8m－2.1m－2.1m－1.2mで、構成する柱穴の形状等は下記の表のとおりである。柱筋の方向はＮ121°Ｗで、区画ＳＸ02 の南縁の段差とほぼ同様である。位置関係から平坦面１に伴う可能性が高い。


Y=65.970
X=-104.460
SA01
1
2
3
4
SA02
1
2
3
4
5
SA03
1
2
3
4
SA04
1
2
SA05
1
2
3
4
基 2
Y=65.980
X=-104.460
0
1:80
4m

第 12 図　柱穴列平面図

柱穴No.	1	2	3	4
平面形	円形	円形	円形	円形
径(m)	0.4	0.4	0.4	0.4
深さ(m)	0.3	0.2	0.3	0.3
底面の標高(m)	60.4	60.7	60.4	60.8
柱痕跡(径:cm)	あり(16)	―	―	―

(9)　柱穴列　ＳＡ04（第 7・9・12 図）

門とみられる 1 間（2.7m）の掘立柱列で、構成する柱穴の形状等は下記の表のとおりである。柱筋の方向は東西でN92°Wで、国土方眼方位に近い。

柱穴No.	1	2
平面形	円形	円形
径(m)	0.5	0.5
深さ(m)	0.5	0.6
底面の標高(m)	60.4	60.2
柱痕跡(径:cm)	あり(20)	―

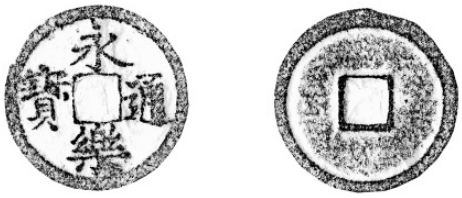
(10)　柱穴列　ＳＡ05（第 7・9・12 図）

塀あるいは建物の一部とみられる 3 間（6.3m）の掘立柱列。柱間寸法は 2.1m等間で、構成する柱穴の形状等は下記の表のとおりである。柱筋の方向は南北でN4°30′Eで、国土方眼方位に近い。ＳＡ01～05 の各柱穴から遺物は出土しなかった。

柱穴No.	1	2	3	4
平面形	円形	円形	円形	円形
径(m)	0.4	0.4	0.4	0.3
深さ(m)	0.3	0.2	0.3	0.4
底面の標高(m)	60.5	60.8	60.4	60.4
柱痕跡	―	―	―	―

２　出土遺物

平成 23 年度調査で、調査区南西側隣り(調査区外)の表土より銭(永楽通宝) 1 点のみが見つかった。



第 13 図　出土遺物

Ⅴ　総　括

１．検出遺構の様相と変遷（第 14 図）

本宿館跡の副郭の東寄りで今回実施した発掘調査では、堀 2 条、土塁 1 基、区画の一部、小土坑群、掘立柱列 5 列を検出した。これらの遺構は、重複関係と位置関係から大きく 2 時期の変遷を認めることができる。各時期の様相は、以下の通りである。

Ⅰ期　区画ＳＸ02 と、それに伴う西落ちの段差・北落ちの法面と方向や位置が調和的な塀とみられる掘立柱列ＳＡ01～03 がある。重複関係からＳＸ02・ＳＡ01 が後述するⅡ期の土塁ＳＸ01 よりも古いことから、Ⅱ期に先行する時期の遺構と考える。

尾根の北寄りを稜線沿いにひな壇状に造成した区画の内部をさらに塀で区画して使われていたことがうかがえる。

Ⅱ期　堀ＳＤ01・02、土塁ＳＸ01 と、ＳＸ01 の基底部裾と方向や位置が調和的な掘立柱列ＳＡ04・ 05 がある。堀や土塁といった城郭に特有の遺構が特徴である。

堀ＳＤ01 は少なくとも大きく 3 回掘られており、いずれも箱堀で副郭側が古くて主郭側が新しい。また、埋まった部分の小規模な掘り直しも認められる。

土塁ＳＸ01 の盛土は堀ＳＤ01 の埋土と同様で、防御の機能を考えれば本来はさらに高かった可能性がある。堀ＳＤ01 を掘削しない限り盛土が確保できないことも考え合わせれば、堀ＳＤ01 と一連で形成された可能性が高い。

掘立柱列ＳＡ04・05 は、形状から前者は門、後者は塀と考えられ、副郭内を塀などで区画して使われていたことがうかがえる。

なお、主に土塁ＳＸ01 の西側に分布する小土坑群に建物や塀の柱穴を含むことは間違いなく、Ⅰ期の区画ＳＸ02 やⅡ期の副郭内に複数の建物や塀があった可能性が高い。また、Ⅰ・Ⅱ期の年代については、指標となる遺物が出土していないため特定できない。

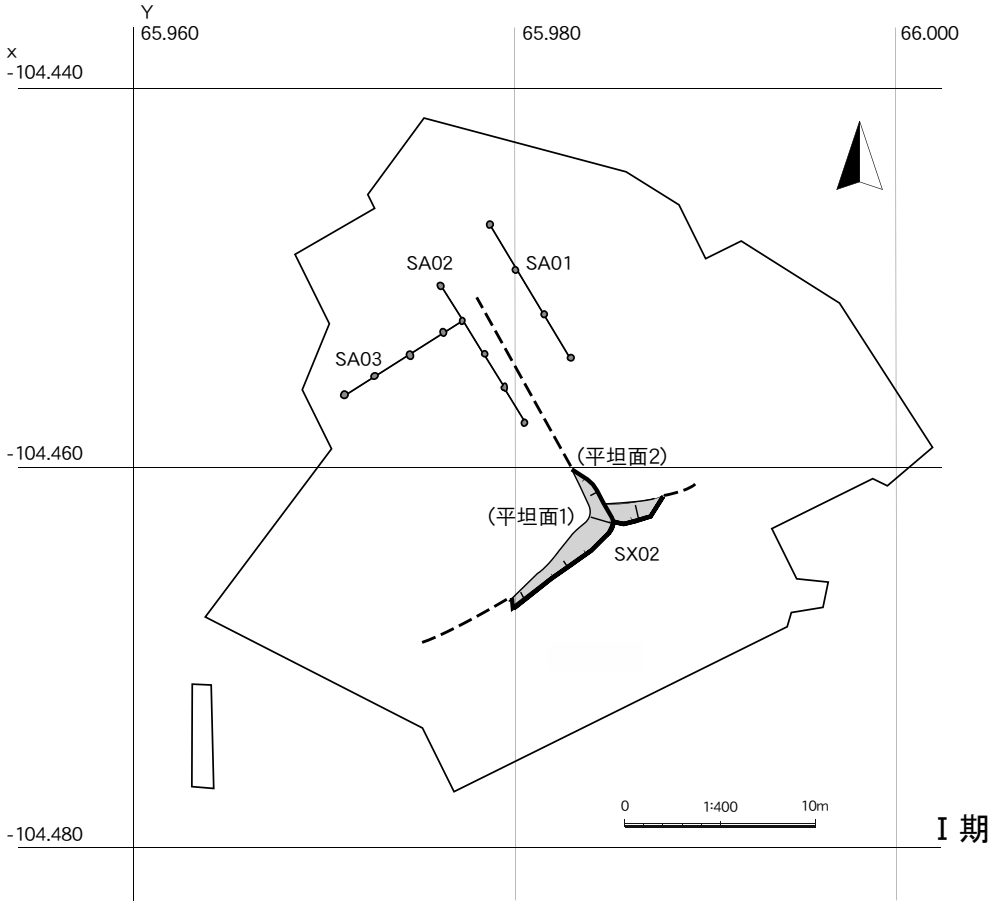
２．今回の調査成果を踏まえた本宿館跡の評価

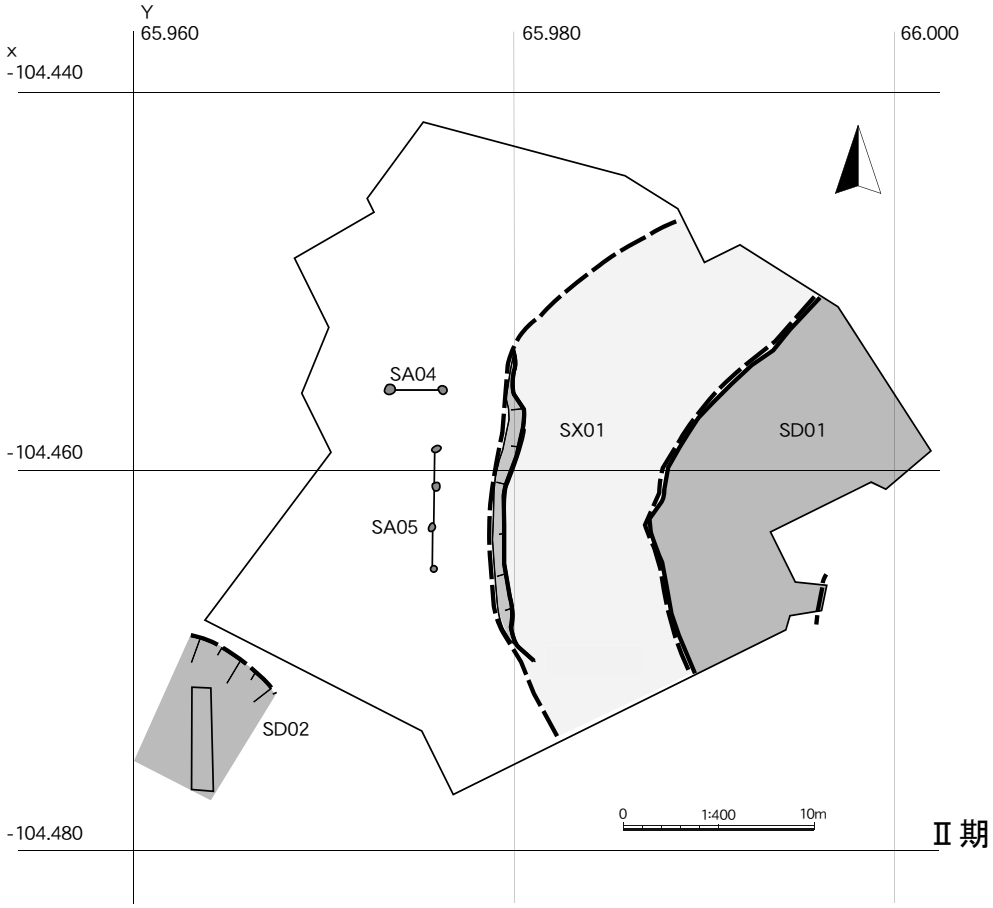
Ⅱ-５歴史的環境 で前述したように、本宿館跡の既存の調査・研究は、過去に紫桃（1972）や岩手県教委（1986）によって地表面観察に基づく縄張りの検討と古文書の記載による城主の推定がある。両者によって指摘されている縄張りの特色は、概ね以下の通りである。

1)　街道に直角に構える（紫桃 1972）
2)　主郭と副郭（あるいは望楼）からなり、両者の間に空堀が切られている（紫桃 1972・岩手県教委 1986）
3)　主郭の南面には 3～4 段の土壇があるが、北面は急傾斜である（紫桃 1972・岩手県教委 1986）
4)　副郭にある熊野神社の参道下に広がる畑地には、土塁状の高まりも確認できる（紫桃 1972・岩手県教委 1986）

城主については、ともに仙台藩が延宝年間（1673～81）に作成した「仙台領古城書上」に「城主日野右馬允」の記載があることを示し、土豪の葛西氏家臣の金野氏との関連を示唆している。

今回の発掘調査では、堀ＳＤ01・02、土塁ＳＸ01 を検出したことから、地表面観察で確認で


Y
65.960
65.980
66.000
x
-104.440
-104.460
-104.480
SA01
SA02
SA03
(平坦面2)
(平坦面1)
SX02
0
1:400
10m
Ⅰ期


Y
65.960
65.980
66.000
x
-104.440
-104.460
-104.480
SA04
SA05
SX01
SD01
SD02
0
1:400
10m
Ⅱ期

第 14 図　遺構変遷図

きた縄張りが城郭である確証が得られ、加えて以下の新たな所見が得られた。

1) 城郭（堀、土塁）に先行する土地利用があり、尾根の北寄りを稜線沿いにひな壇状に造成した区画の内部を塀で区画して使われている
2) 主郭と副郭の間だけでなく、南側にも堀を伴う
3) 主郭と副郭の間の堀と土塁は、少なくとも 2 回は造り直され、堀内の小規模な掘り直しも繰り返し行われている
4) 副郭内は塀などで区画して使われている

したがって、地表面観察で確認できた縄張りは複数時期の変遷を経たもので、現状では認識できない先行の土地利用や防御施設・構造物（建物・塀）があることに留意する必要がある。先行する土地利用については、この城郭の前身の館の可能性もあり、その後の社会情勢の悪化に伴って防御施設を強化して城郭に造り替えたという変遷も検討する余地がある。

なお、陸前高田市内の城館跡のこれまでの調査例には、矢作町の古館跡（岩手県埋文センター 1987）と高田町の花館跡（岩手県埋文センター2013）がある。両者はともに平野に面する丘陵の先端部に営まれている。古館跡では曲輪とその東・西側を画する斜面、北側を画する堀（箱堀）を検出し、曲輪内に掘立柱建物を伴うことを確認した。出土遺物には 16 世紀頃の輸入陶磁器（白磁・染付）と国産陶磁器（美濃）がある。花館跡では主郭（土塁を伴う）・副郭とそれらを囲む堀（薬研堀）を検出し、曲輪内に柱穴や焼土坑が群在することを確認した。出土遺物には 15～16 世紀の輸入陶磁器（青磁等）と国産陶磁器（常滑）がある。（花館跡について岩手県埋蔵文化財センター村木敬氏より教示）

本宿館跡の時期については、出土遺物はないが、前述した陸前高田市内の城館跡の調査例と立地や構成される遺構の特徴が同様であることから、同時期の可能性が考えられる。

本宿館跡は、陸前高田市の横田町南部における中世の社会構造や不安定な社会情勢を反映する遺跡である。社会構造や社会情勢については、本来であれば集落遺跡と総合して考察すべきであるが、Ⅱ－４周辺の遺跡 で前述したように周辺には同時期の集落遺跡や遺物散布地が知られていないので、中世の地域史研究の資料として占めるウエイトは大きい。

今後の調査・研究にあたっては、城郭の機能面だけでなく、構築の労力や遺構・遺物の特徴と社会構造との関連、遺構の変遷と社会情勢との関連に着目する必要があると考える。

参考・引用文献

陸前高田市史編集委員会　『陸前高田市史　第二巻　地質・考古編』　1994
陸前高田市史編集委員会　『陸前高田市史　第三巻　沿革編(上)』　1995
岩手県　『岩手県史　第二巻　中世篇(上)』　1961
紫桃正隆　『史料　仙台領内古城館・第１巻』　宝文堂　1972
岩手県教育委員会　『岩手県中世城館跡分布調査報告書』(岩手県文化財調査報告書 82)　1986
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　『打越・東角地遺跡・古館跡発掘調査報告書』
(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 131)　1988

写 真 図 版

遠景①（北西から）

遠景②（南西から）

主郭の平坦面（東から）

主郭北側の腰曲輪（東から）

熊野神社下の畑地（左奥が土塁、南東から）

写真図版１　遺跡周辺の状況

調査地遠景（東方上空から）

調査地全景（上空から）

写真図版２　調査地（2010 年）

調査区全景(北東から)

調査区全景(南東から)

調査区全景・SX02(西から)

写真図版３　調査地(2011 年)

堀 SD01 A-A'

堀 SD01 B-B'

堀 SD02 D-D'

写真図版４　堀 SD01・ SD02

土墨 SX01

土墨 SX01(南西から)

土墨 SX01 土層断面 C-C'

写真図版５　土墨 SX01

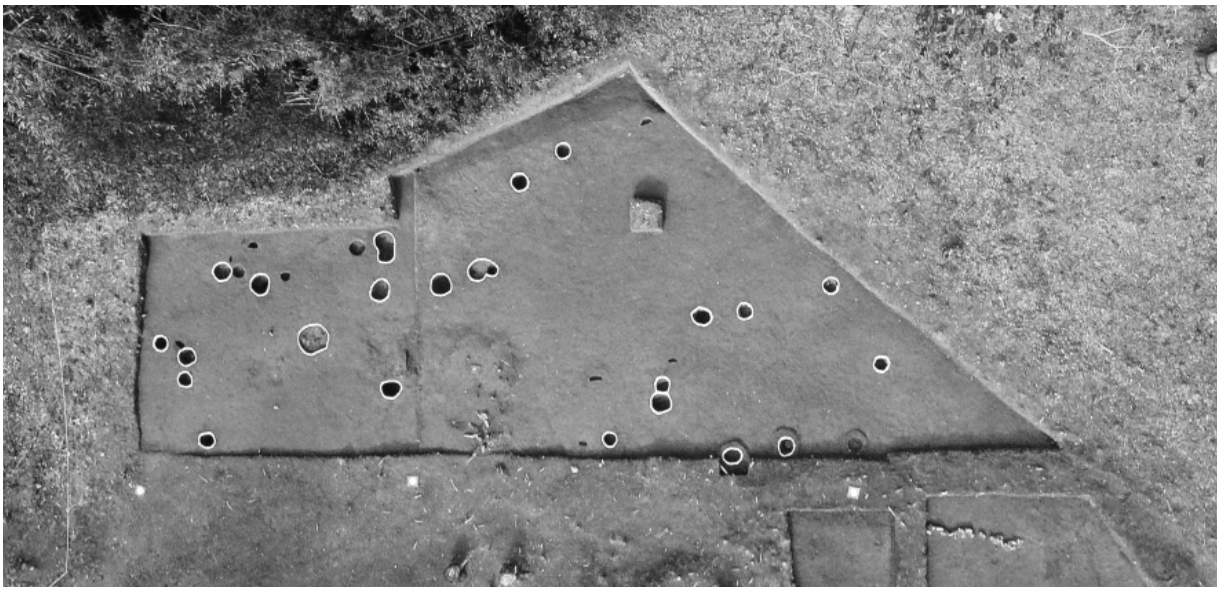
土墨 SX01 とその西側の小土坑群(西から)

土墨 SX01 とその西側の小土坑群(北から)

土墨 SX01 とその西側の小土坑群(南から)

写真図版６　小土坑群①

土墨 SX01 除去後の小土坑群(北西から)



調査区北部分の小土坑群(2010 年)

写真図版７　小土坑群②

土坑 SK01(奥)・土坑 SK02(手前)

土坑 SK03(北から)

土坑 SK04(南から)

写真図版８　土坑・出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	もとじゅくたてあとはっくつちょうさほうこくしょ
書名	本宿館跡発掘調査報告書
副書名	熊野神社社殿移築工事関連遺跡発掘調査
巻次	―
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告書
シリーズ番号	29
編著者名	安井宣也、後藤円
編集機関	陸前高田市教育委員会
所在地	岩手県陸前高田市高田町字鳴石42-5
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
もとじゅくたて 本宿館	いわてけんりくぜんたかたし 岩手県陸前高田市 よこたちょうあざもとじゅく 横田町字本宿53-2	03210	NF46 -2272	39° 3′ 20″3	141° 35′ 40″5	20100416～ 20101215 20110516～ 20110719	334 849	熊野神社 社殿移築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本宿館	城館跡	中世	空堀、土塁、柱穴列	銭	

平成 27 年 3 月 25 日　印刷
平成 27 年 3 月 31 日　発行

陸前高田市文化財調査報告書第 29 集

本宿館(横田城)跡発掘調査報告書

著作権所有　岩手県陸前高田市高田町字鳴石 42-5
発　行　者　陸前高田市教育委員会
印　刷　者　岩手県陸前高田市竹駒町字相川 1-1
有限会社　第一印刷